324-158

宗教大系

大屋德城著

明治
42 12 18
内交

序

德城大屋君は余と同郷の人なり篤學を以て聞ゆ夙に哲學を修め業已に成りて研鑽尚怠らず造詣頗る深し頃日宗教大系を著し來りて之を余に示す余受けて之を讀む行文平易にして指導切實なり凡宗教の事たる古今說き得て明了なるもの甚少し況哉說き難きを俗解して平々坦々大道を直行する此著の如きもの余未曾之を見ず蓋君學に篤く行に勤む自ら得る所あるにあらずんば焉ぞ能く如此を得んや讀者世界の大宗教を概觀して心に得るあらば著者の喜び可知矣

十月亭艮亭に識す

白仁武

自序

世界に宗教は多く、深遠なる教義を有するものも亦少からず。本書固より片々たる一小冊子、豈說きて盡したりといはむや。唯、宗教の如何なるものなるかを知らむと欲する人に向つて、聊か其の梗概を述べたるのみ。

現今我が教育ある人士と雖も、宗教に關する智識に至つては、動もすれば、甚だ豐かなりと稱すること能はざるやの感なきを得ず。殊に身國民教育の職にある人士にして、往々猶宗教の何たるやを解せず、宗教無用の舊說に依頼して、殊更に耳を覆はむとする傾向のほの見ゆるは、決して慶すべきことにあらじ。

宗教絕對論が過去の迷想なるが如く、宗教無用論も亦過去の迷想たらずむばあらず。抑宗教的情緒は人間固有のものにして深く人格の奥底に根據を有するもの、之れを養ひ、之れを正しきに指導して、其の完きを致し、其の醇なるに到らしむるは、家長としても、教育家としても、正に力むべき重要事たり。而

も、之れを察せずして、宇宙の理想に對する至純至美なる眞情の萠芽を剪除して、以つて自ら得たりとせば、恐らくは、異日、敬虔の念なく、倫理的情緒に乏しき人格を得て、臍を噬むの悔いを遺さむ。加之、方今交通の自由なる、思想の紛亂せる、共に種々の宗教を播布し、發生せしむるに便宜甚だ多し。此に於いてか從來世界に分布せる舊宗教の概略に通じ、紛然として起り來る新信仰新主張の由つて來るところを察し、其の眞僞好醜を判つの豫料たらしむる必要も亦甚だ少しとはいふべからず。眞正なる宗教の甚だ尊重すべきと等しく、僞醜なる迷信病宗は甚だ恐るべき性質を有す。之れを古へにして、彼の立川流の如きあり。倶に人間の弱點に乘じ民衆の無識に乘じて、其の暴威を逞しくせむとす。警めずむばあるべからず。

寔に病宗は毒草の如し。彼の毒草の山野に生ずるや、其の葉は強烈なる濃綠に活き、其の花は高度の色彩に發く。是を以つて、人を醉はしむるに宜し。而も一たび之れを唇にせむか、烈々たる毒氣腦底を貫き、滴々たる毒汁肺腑を刺して、糜爛剝蝕、其の人を狂にし、其の人を斃さずむば止まざらむとす。豈懼

れざるを得むや。

著者は宗教絕對論者にも非ず。宗教無用論者にも非ず。又本書に於いて、或種の宗教を鼓吹せむとするにもあらず。唯宗教が人生に對し、犯す可からざる權威を有するを認むると共に、病的宗教の甚だ有害なることを確信するものなり。仍つて、卷頭に一言を題して所感を述ぶ。

明治四十二年五月稿成るの日

著者しるす

凡例

一　本書は一般人士が知悉し置く必要ありと思はるゝ世界の主なる宗教の要領を平易に敍述せむとて試みたるものなり。

一　本書に說くところの宗教の外にも、亦重要なるもの少からず。例へば神道の如きは其の一なり。而も、紙數に限りありて、悉く擧ぐること能はざりき。或は他日補ふことあるべし。

一　本書は各宗教につき(一)敎祖又は立敎の由來(二)經典(三)敎義及び習慣の三項を中心として敍述し、傍ら必要と思はるゝ事項を附記せり。

一　本書にあらはるゝ固有名詞の若干には傍訓を附して、誤讀なからむことを期せり。是れ宗敎の成語には慣訓(よみくせ)少からざるを以つてなり。

一　本書は卷末に三種の附錄を添へたり。希くは幾分の參考に資するを得むか。

宗教大系　目次

第一章　緒論……（自一　至一九）
第一節　宗教とは何ぞや……一
第二節　宗教意識の心理的説明……九
第三節　信仰と智識及び迷信……一四
第二章　總説……（自二〇　至二九）
第一節　世界の主なる宗教系統……二〇
第二節　宗教の分類……二二
第三節　宗教の分布及び其の制度……二五
第三章　儒教……（自三〇　至四五）
第一節　孔子……三〇
第二節　儒教の經典……三四

第三節　儒教の教義……三九
第四章　道教……（自四六至五八）
第一節　老子……四六
第二節　道教の經典……四六
第三節　道教の教義……四八
(イ)　宇宙の本體
(ロ)　厭世と解脫
(ハ)　神仙と錬丹
第五章　波羅門教……（自五九至七八）
第一節　印度民族の神話と波羅門教の起原……五九
第二節　波羅門教の經典……六二
第三節　波羅門教の社會制度……六七
第四節　波羅門教の教義……七二
(イ)　世界の成立と破壞
(ロ)　輪廻と解脫

第一節　印度教
第六章　佛教……（自七九至一一九）
第一節　釋迦及び其の時代……七九
(イ)　釋迦出現の時代
(ロ)　印度思想に於ける釋迦の地位
(ハ)　釋迦の略傳
第二節　佛教の經典……九八
(イ)　經典の種類
(ロ)　根本經典はなきか
(ハ)　經典編輯の顚末
第三節　佛教の教義……一〇五
(イ)　印度思想の共通點
(ロ)　繼承的方面
(ハ)　革新的方面
(ニ)　佛教の理想
第四節　佛教諸宗派の解……一一五

第七章　波斯教……（自一二〇至一二六）
第一節　ゾロアスター……一二〇
第二節　波斯教の經典……一二三
第三節　波斯教の教義……一二四
第八章　猶太教……（自一二七至一四四）
第一節　建國エホバ及び預言者……一二七
第二節　猶太教の經典……一三六
第三節　猶太教の教義……一三九
第九章　基督教……（自一四五至一六五）
第一節　イエス及び其の時代……一四五
第二節　基督教の經典……一五四
第三節　基督教の教義……一五八
第四節　ニゲーア會議信條決議……一六三

第十章　回回教……（自一六六至一七六）
第一節　マホメット及び其の時代……一六六
第二節　回回教の經典……一七四
第三節　回回教の教義……一七四
附錄
附錄の一　日本現在宗教一覽……一七九
附錄の二　佛教諸宗派本山一覽……一九一
附錄の三　宗教名數……一九六

宗教大系

第一章　緒論

第一節　宗教とは何ぞや

「宗教とは何でせう？」

人が若し斯様な問を發したならば、諸君は何と答へらるゝでせうか、或は宗教とは地獄極樂を説くものであると答ふる人もあらうし、或は祖先を大事にする事だと教ふる人もありませう。成程未來に地獄極樂があると教へて夫れ故に善い事をなし、悪い事をしてはならぬと説くのも宗教でありませうし、或は又吾々は祖先の御蔭で今日かゝる幸福を享けて居るのだから、謹みて祖先を大事にせなければならぬと教ふるのも宗教でありませう。諸君の答

は此の點に於いては甚だ正しい。併しながら完全とは申されぬ。如何となれば地獄極樂をいはぬ宗教もあるし、祖先の祭祀を要とせぬ宗教もあるからである。凡そ單純な問程答へにくいものはない。希臘の大哲ソクラテスが言はれたやうに

「人間の本統の智識とは物の定義を知ること」

てある。物の定義といふことは甚だむづかしいものである。

「宗教とは何てせう?」

と問はれた時には、誰の頭にも、

「あゝ宗教? 宗教とはあんなものだが……」

といふ考は忽ち浮ぶが、さて明瞭な答は甚だなしにくいのである。是れ吾れが物を知る時に一部一部ばかり知つて、全體として統一した智識を得ること甚だ難いからである。譬へば吾れ吾れの智識は甚だ漠然として居て、そこらに散らばつて居る珊瑚珠のやうである。一つ二つは確に分つてをるがさて之れを提げて他人に示さうとする時は、前後を貫通した絲がないので示

すことが出來ぬ。夫れて、

「宗教とは何てせう?」

と發問された時は、大體は分つて居ながら、明かな答は甚だなし難いのである。

そこて、

「宗教とは何ぞや」

といふ定義を先づ知つて置く必要が生じて來る。

これまて、基督教のみを眼中に置いてゐた西洋の學者の間には、宗教の定義としてて、

「宗教とは神と人との關係」

を説くものてある。換言すれば人が神と一致する方法を教ふるのが宗教てあるといふやうな説をなす人が多かつた。成程或宗教は神と人との關係を説くが、さりとてすべての宗教が神人の合一を説くとはいへぬ。又此にいふ神といふ言葉の解釋次第にもよるが、此の説はすべての宗教の要點を遺憾なく提げてをる定義てあるといふことは困難てあらう。最も基督教や眞宗の

やうなゴッドや、阿彌陀如來と人との關係を說き、合一を理想とする宗教もある。併しながら、禪宗のやうな宗旨では唯自己の眞性を徹見するのが理想であつて、有形にせよ。無形にせよ。少しも神や佛に一致しよう、合一しようと企てぬのである。それて此の定義では、總ての宗教を包括することは出來ぬ而して、西洋の學者は此の定義にいふ「神」なる言葉を大概は「人格的の神」といふやうに考へて居たのであるから、益、其の「神」なる言葉の內容が狹くなつて來るそれで、どうしても、此の意味に神を解して

「宗教とは神と人との關係を說くものなり」

といふことでは宗教を定義すること、即ち各宗教にあてはめて矛盾衝突のない規定とはいはれぬ。一言にいへば、宗教の定義となる資格がないのである。果して然らば、如何やうに規定したならば、宗教の定義が出來るであらうか。

固より宗教といふ言葉の最初の意味と今日の意味とは大變異ふやうになつてをる。即ち言語の內容が時代と共に變遷してをる。加之、宗教の定義を試みた多くの學者の說も、人により、時代に依つて段々變つてをる。併し宗教

なる言葉の意味の變遷や、宗教の定義規定のうつりかはりを細かく論ずるのは本書の目的ではない。唯手短に宗教のいかなるものなるかを說けばそれて目的は十分達せらるゝのである。故に今は單刀直入宗教の定義を規定しよう。

さて前の定義はあの儘では宗教の嚴密な正確な定義となり兼ねることは今說いた通りである。然らばあの定義は全く間違つて居るのであらうか。全く用ふることは出來ぬのであらうか。否、決して左樣な譯ではない。唯神といふ言葉がどうも十分でない。前にも述べた通り、神といふ言葉は有形の神、無形の神共に含んでをるとしても、吾れ吾れは習慣上神といへば「非常に勝れた御方」「威力廣大な御方」「全知全能の御方」といふ風に人格的に考へる癖又は傾きがある。故に今假りに前の定義の神といふ言葉を左の通りに變更してみよう。

「宗教とは神又は神的狀態と人との關係とを說くものなり」

そこて、右の定義に於ける神といふ言葉を人格的の神又は佛を意味する言

葉と假定する。さうすれば、眞宗の阿彌陀如來や、基督敎のゴッドの如きは明かにこの中に含まるのである。次に神的狀態といふ新しい言葉を以つて、人格的神や佛の樣なえらいすぐれた、理想的の狀態又は境界をさすものとする。然れば、此の中に禪宗の見性のやうな與奪自在の境界、釋迦の說かれた涅槃那のやうなあらゆる緊縛即ち情慾の拘束を脫解した高い境界、孔子のいはれた心の欲する所に從うて行矩を越えずといふ超道德の境界等皆な此の中にはいつて來るのである。故にかくすれば、あらゆる宗敎は此の定義にあてはまるのである。

然らば、山岳を崇拜したり、樹木を崇拜したりする古への宗敎や、今でも野蠻人の信仰は、宗敎といふ資格がないのかと問ふ人があるかもしれぬ。併し夫れ等も劣等てこそあれ、やはり一種の宗敎たることは疑がない。然らば何故に左樣な宗敎は今の定義にあてはまるのか。詳しくいへば、左樣な宗敎は前の定義にあるやうな人格的の神をも崇拜しないし、さればとて又一種のえらい神のやうな理想的の境界を目的とするのでもない。故にどうしても此の

定義ては左樣なものを規定することは出來ぬではないかと疑問を提出する人があるかもしれぬ。成程一應尤もな問てある。併しよくよく研究してみれば、山岳崇拜や樹木崇拜も山とは唯一の土塊の集つた高いもの、樹とは地から生えて花を着け實をもつものと、考へて崇拜して居るのではない。野蠻人と雖も、或は山岳の巍然として、天空を劈き、日月も中腰を避けて、天を回り、雲霧も頂きを擺れて麓にさまよひ、又は火山がえらい勢を以つて、爆發して、天日の光を奪ひ、灰雨を降らす等の現象をみて、地文の事や、地質の事は勿論、火山の理を知らぬ幼稚な心に空想を描いて、山は恐るべきもの、自由自在の大威力あるもの、下界を見下して人間の善惡を監視してゐるもの、人間が惡い事をすれば乾度鳴動したり、火を吐いたりして、家畜を奪ひ、田圃の實りを荒らす恐ろしいものと考へる樣になり、どうか其の怒りにふれまいと謹んで禮拜するのである。故に山を唯土塊の隆起したものと考へてゐるのではなく、實に生殺與奪の權力をもつてをる威德廣大なる神であると考へて拜んでをるのである。植物の場合も是れと同じく說明する事が出來る。例へばあの樹に觸れたも

のは昔から一人として病氣にかゝらぬ者はないとか、此の樹の枝を伐れば大洪水大暴風があるとかといふ樣な考へがかさなつて、段々あの樹は神であらう、或は神の栖家であらうといふ風に一本の樹木をも神の威力を具へたものと思ふ樣になるので、或はしめを張り、木蔭に祠(ほこら)を建てて崇拜する樣になる。斯くの如く山岳の場合も樹木の場合も神として拜むのであるから、前の定義にあてはめて、決して矛盾せぬ事となる。而して、劣等な宗教では、唯神又は神の如きものを恐れて禍の來ぬ樣に禮拜供養するのが多いが、宗教が段々發達すると、神又は神的狀態と人なる吾れとの合一や接近を希ひ、理想目的とする樣になる。例へば阿彌陀如來を信仰して、極樂淨土に生まれたいとか、ゴッドの救濟に賴つて天國に生まれたいとか、或は見性して悟道したいとか希求する樣になる。これはたしかに宗教の進歩である。

夫れから、今一つ宗教の性質として、宗教の信仰が確に成り立つた結果、心の平和を得るのである。即ち安心立命を得るのである。

以上で畧宗教の何たるかゞ分つたであらう。故に今度は少しく異つた方

面から、宗教を說明してみよう。即ち宗教は人間の心の中に成立つものであるが、然らば、宗教心とか、信仰とかいふものは、如何なる心のはたらきであらうか。即ち宗教心又は宗教意識の心理的說明を試みてみようと思ふ。

第二節　宗教意識の心理的說明

人間の心はいかなるものであるか。昔の學者は人間には心即ち魂といふ一の實體があると考へてゐた。そこで、其の魂が暫く身體を離れる時は、人間は失神したり、睡眠したりするので、其の魂が肉體に還つて來れば、さめるのである。而して一度離れた魂が再び元の肉體に還つて來ぬ時は即ち死なる現象が起ると說明して來た。然るに近時の研究では左樣な特別に形を具へた魂等はあるかないか、道理上どうしてもあるとは考へられぬので、心は唯無形のはたらきであるといふ事となり、而して其の心を作用(はたらき)の上からみて、智、情、意の三方面に分類する樣になつた。

然らば、宗教は此の心の三方面の何れの作用に依つて起るのであらうか。

それは主として感情の作用であるといふ事が出來る。此に主としてといふ條件がある。之は注意して貰はねばならぬ。元來心の作用は水の流れの樣なもので、皆連續してをるので、決してハッキリと智、情、意の三つに分ける事は出來ぬ。智の中にも情が幾分交つてをるし、情の中にも意が幾分交つてをるし、相互に入れ交つてをるのである。故に左樣に分つてはゐても、就中智の作用が多い心の作用を心の智の方面とし、情の作用の多い部分を情の方面とし、意の作用の多い方面を意の方面とする。故に、宗教心も感情の方面に屬する事は明かであるが幾分か智や意の方面にも關係ある事を忘れてはならぬ。

宗教心又は宗教意識は古來樣々の學者に依つて樣々に說明された。或る學者は

「宗教心は恐怖の情より起る」

といひ、或る學者は宗教心は

「宇宙の大秩序の如き非常に偉大なる我れ以外の力の存するを認むる事なり」

と規定した。併し此れ等の說明は固より宗教心の一方面をいひあらはしてをるには相違ないが、未だ全體をいひ盡してをるとはいへぬ。故に今宗教心又は宗教意識は智、情、意の三方面の上に成立つもので、就中感情を中心とする心の作用である事を明かにしようと思ふ。

先づ此に

「宗教心とは人生及び世界の根柢に歸依する精神作用なり」

といふ假定を立てゝ置かう。さて人生及び世界の根柢とは何を指すのであるか。

人間はいかに偉い人でも完全無闕全智全能といふ譯には行かぬ。必ずや闕點弱點を有してをる。又世界はいかに微妙に出來てゐても、少しも不足や不滿がないといふ譯にはいかぬ。必ずや厄ふべきものがあつたり、或はあれば好いにと希ふ事が缺けてゐたりする。手短かくいへば、世界や人生は理想的に完全圓滿なものではない。そこて人々は此れ等の人生や世界は不完全なものである。決して絕對的のものではない。故に斯る不完全な人生や世

界の奥には何か必ず絶對的な完全圓滿な根柢となつてをるものがあるに相違ないといふ考を起すのである。即ち夫れ夫れ理想的の物或は狀態を描いて、是れが人生や世界の根柢であらうと考へて來る。即ち精神も肉體も自然も必ずや終極には此處に至極し、歸趣せねばならぬものがあるに相違ないと考へて、其の根柢歸趣に向つて歸依せんとするのである。而して宇宙人生最終の歸趣を名づけて、或は神と呼び、或は涅槃と唱へ、或は佛と稱し、或は本來の面目といふのである。而して始めは斯るものがあるといふ事を認むるのであるから、此の認むるといふ點に於いて智の作用が起つてをる。例へば「山に雪が降つた」といふことを認むるのは智の作用であつて、「山に雪が降つて美し」い」といふ感情即ち情の作用や、「あの雪をとりたい」といふ欲求即ち意志の作用とは異つてをる。故に宗教心には宇宙人生の根柢歸趣を認むるといふ智の作用が働いてをる事は明かである。

次に此の宇宙人生の根柢歸趣は至眞至善至美のものである。かくて、實に眞なる哉。實に善なる哉。實に美なる哉といふ歎美渴仰の情が起ると共に

一方には我が宇宙人生の缺陷を厭ふ感情が起る。こゝに於いてかかれに纏りたい、たよりたいといふ感情が油然として湧いて來る。是れが宗教意識の中心をなす所の感情である。而して此の感情が發達增進すると、彼れを希ひ、彼れを獲たいといふ熱烈なる感情が起つて來る。而して此の感情が强ければ强い程、彼れと合一したい、一致したい、彼處に到きたいといふ欲求努力の心を生じて來る事も亦强い。而して此の欲求努力は即ち意志の作用であつて、いかなる難行苦行も、いかなる迫害も突破して行く處までゆかねば死すとも止まぬといふ激烈なる求道心勇猛心向上心となつてあらはれるのである。

故に宗教心の一部分としては、宇宙人生の根柢歸趣を恐しい神、恐しい威力と考へ認めて恐怖する心も起るであらうし、自れの不完全、世間の不完全を厭ふ厭世の念も起るであらうし、種々樣々の心が起るのである。而して禪宗の如きは宇宙人生の根柢歸趣を自己の眞性であると認めて、不惜身命の勇を起すのである。

以上略説した通り、宗教意識は敢へて感情のみに依つて起るのではない。必ず智情意三方面の上に成立するのである。換言すれば、心の作用全體の上に成立つのである。世に往々宗教意識は純粋に感情の上にのみ成立つものであるといふ人のあるのは、唯宗教意識は感情を中心として出來るのであるといふ意味に解すべきである。若し然らずして、宗教心は感情ばかりて、智の作用も、意の作用もはいつてをらぬのであると考ふる人があるならば、大いなる誤解といはねばならぬ。

第三節　信仰と智識及び迷信

上に述べた樣に、宗教心は宇宙人生の根柢歸趣を認めて、之れに歸依憧憬する感情を中心とした心的作用であるが、此に認むると言うても、何も推理や研究で認め認識するのではなくして、多くは頓悟直覺するのであるから、哲學や科學とは違ふのである。その知的作用は極めて微なるものであるにはちがひないが、殆んど感情ばかりといつてよい位である。故に純粋に原始的な宗

教意識と智識とは甚だ離れたもので、兩方の範圍が異つてをるので、智識は夫れに對して批評し批判するわけにはいかぬのである。全く種類の異つたものは較ぶる事が出來ぬ。然るに宗教の常として、必ず教祖の直覺した感情を他人に傳へねば止まぬものである。かく感情を他人に傳へるためには、言語や文字を借つて來て、傳へようとする人に分からせねばならぬ。凡そ分からせるといふ事は智の作用である。わからせるといふ事は知らせる、了解させるといふ事である。故に分らせる爲には感情を智の形に換へねばならぬ。さて感情といふものは智の樣にハッキリしたものでなく、極めてとらへにくいものである。即ち以心傳心で中々人に分る樣に傳へる事はむづかしい。夫れを強ひて傳へんとするのであるから、いかによく傳へても元の感情とは幾分異つたものになるのは當然の事である。而して既に感情を智の形に變へたのであるから、その感情は智識となつたのである。かく教祖が自分の直覺した純粋な感情を智の形にして周圍の人に傳へたのが、說教である。而して此の說教は段々其の弟子又は信徒が智を以つて解釋

し、或は其の時代時代の哲學や科學の說を取入れて、調和を圖り等する中に一系の智識となるので、此に敎理又は敎義信條と呼ばるるものが出來るのである。此に於いてか、宗敎も亦智の分子が多くなり、智を以つて說明するに至るので、始めて他の智識即ち哲學科學と同じ範圍に入り來つて、互に交涉を生じ衝突を來すのである。故に宗敎と哲學科學とは全く異つたものではないが、それと同時に宗敎は智識ばかりで說明の出來るものではない。

次に本統の正しい信仰と迷信との區別を述べよう。人の知る通りに世には宗敎上の信仰の爲に病氣をしても、醫藥をのまず、唯御神水や御まじなひ等で病氣を癒さうとする者がある。否必ず癒せると信じて疑はないものがある。それから蝗蟲等の發生した時にも農學上から割出した驅除法を施さないで、何々神社の御札とか、神水とかをふり撒いて、蟲を追拂はんとする者が田舍には少くない。世人は此れ等宗敎上の一種の信仰を迷信と名づけて、愚なる行爲だと笑うてをる。斯くの如き信仰は實に人生及び社會に大害を流すものであるから、須らく排斥せねばならぬ。併し此の通りに表面にまで能く

其の害が分つてをるものは善いが、明かに迷信と分らないでゐて、實は非常なる害を與へてをるものが少くない。故に迷信とは如何なるものをいふかといふ事を大體知つて置く必要がある。

さて迷信とは如何なる宗敎上の信仰を指すのであらうか。之れを細かく規定する事は甚だ困難である。今極めて概略をいへば、迷信とは宗敎上の誤れる信仰である。詳しくいへば誤れる智識を含んだ信仰である。誤れる智識を含んだ信仰であるから、常識に外れた事をするのである。從つて其の結果人生及び社會に惡い影響を及ぼす事が多いのである。既に迷信は誤れる智識を含んだ信仰であるといつたが、然らば其の「誤れる智識」といふ言葉の中の「誤れる」とは何と比べて誤つてをる事を指すのであるか。唯漠然誤つてをる智識を含んだ信仰というても、其の意味がハッキリせぬ。そこで「何に比べて誤つてをるか」といふ疑問が出る。此の「何に比べて」といふ事は學術的にいへば「何を標準として」といふ事になる。そこで、宗敎上眞正の信仰と迷信とを區別するものの標準（即ち標準）は何であるかといふ問題になつて來る。

さて此の標準は果して何てあらうか。之れも精細に述べると中々むづかしくなる。故に今は極大ざつぱに說明して置かう。此の標準となるものは、其の時代時代の智識てある。詳しくいへば、其の時代、其の時代の道德、法律、醫學、物理等の哲學科學の智識てある。是れ等の智識と撞着矛盾する宗教上の信仰は正しい信仰て、是れ等の智識と撞着矛盾せぬ宗教上の信仰即ち迷信てあるとかう見て置けば大體上誤りはないのてある。

今例を以つて說明しよう。病氣の時に神水や祈禱を以つて癒さんとするのは何人も迷信と思ふてあらう。何故に迷信てあるか。それはいふ迄もなく今の時代の智識と撞着してをるからてある。詳しくいへば今の時代の智識の中の醫學上の智識や、生理學上の智識と合はぬからてある。今の生理學、醫學の智識ては、病氣は生活體の常正を失つてをるから起るので、之れを治するには醫藥及び醫術に依らねばならぬ。藥劑や手術、衞生を外にしては病氣を治することは出來ぬのてある。然るに神水や祈禱を以つて病を治せんとするのは、醫術ても、醫藥ても、衞生てもない。全く是れ等の智識と撞着した方

法てある。故に之を迷信と稱するのてある。又前に引いた害蟲驅除に神水や神符を用ゆるのも、此れと同樣に說明することが出來る。即ち害蟲に對する此れ等の方法は今の農學の智識に一つも一致したところのない方法てある。全く撞着した矛盾した方法てある。故に此れも亦迷信と稱せらるゝのてある。

凡そ宗教上の正しい信仰は、個人の動力となり、社會の活力となり、非常なる善い効果を人生の實際に及ぼすものてあるが、迷信は反對に非常な害毒を及ぼすものてある。實に迷信は社會進步の大敵てある。

第二章　總說

第一節　世界の主なる宗教系統

世界には種々の宗教がある。吾れ吾れの普通に知つてをる宗教でも數十種の多きに上つてをる。即ち儒教あり、道教あり、拜火教あり、佛教あり、基督教ありといふ有樣である。然らば此れ等の宗教は元々各自に一つ宛獨立して起つたのであらうか。而して其の間には少しの關係系統もないのであらうか。否。彼れ等は悉く長い河の如く系統を引いてをるのではないが、夫れに水脈を連ねてゐて、恰も數條の大河が世界の大平野に西に東に貫流してをる樣なものである。然らば此れ等の河は幾條あるであらうか。即ち宗教の系統は幾系あるであらうか。これ大に注意すべき問題である。

世界の宗教は其の數甚だ多いが、今其の主なるものに就いて、系統を調べて見れば、凡そ三つの大系統を作る事が出來る。其の三つとは何であらうか。曰く、

（一）蒙古民族の宗教系
（二）アールヤ民族の宗教系
（三）セミチック民族の宗教系

是れである。今順次に各について說明しよう。

（一）蒙古民族の宗教系　これは支那人の宗教をさすのである。支那人の宗教は大なるものが二つある。即ち儒教と道教である。而して此の二教は支那の古代思想に基いて起つたもので、儒教は北方思想を代表し、道教は南方思想を代表してをる。

（二）「アールヤ」民族の宗教系　これは波斯と印度の宗教系統である。此の二國の祖先は太古の時代に共に西方亞細亞から來たので、共通な信仰を以つてゐたが、（波羅門教の部印度民族の神話參照）一部は印度に入つて「吠陀」以下の宗教思想を編成し、後に波羅門教を話し波斯に止つた一部は太古共通の信仰を改良して、拜火教を立てた。而して印度に於いては、波羅門教思想の粹を鍾めて、佛教が出來た。故に佛教も亦此の系統を汲んでをるのである。

(三) セミチック民族の宗教系

此の民族の主なる思想は西方亞細亞にある一神を拜する思想である。此の思想から猶太教が興り、猶太教に反抗し古への一神崇拜思想の粹を發揮して基督教が出來、一神崇拜の熱烈なる信仰がアラビアで回回教となつて現れた。

以上の三大系統を表示すれば左の通りである。

(一) 蒙古民族 ─ 儒教 / 道教

(二) アールヤ民族 ─ 波羅門教 ─ 佛教 / 拜火教

(三) セミチック民族 ─ 猶太教 ─ 基督教 / 回回教

第二節 宗教の分類

宗教の中には日月星辰等の天然現象を崇拜するものもあれば、蛇や鷹や火

焰を崇拜するものもある。或は獨一の神を拜し、或は無數の神を拜する宗教もある。斯く宗教は夫れ夫れ其の宗教に限つた方面を有つて居るが、元來同じ人間の精神上に成立つものであるから、似た點、通じた點も少くないのである。而して其の相似た點を捕へて宗教を分類する手がゝりとする。

凡そ宗教の分類法は學者に依つて異り、種々の方法があるであらうが、其の最も普通な分類法は左に掲ぐる如きものであらう。

(一) 多神教

(二) 一神教

(三) 汎神教

即ち崇拜の對象となる神の數に基いて分類するのである。今各項に就いて少しく說明を加へよう。

(一) 多神教

是れ崇拜する神の數が二神以上であるから、多神教と名くるのである。上古の天然現象の威力を仰いでこれを神とした宗教や、種々の動物や器物を神と

敬うた宗教は此の中にはいるので、其の最もよい例は希臘の宗教である。希臘の宗教は多くの神々が或は戰ひ、或は敗れた平和と戰爭の一幕といつても差支ない位である。此れ等の多くの神々の行動は古詩人の詩に描かれて、今に遺つてをるのである。

(二) 一神教

多神教に反して、唯一體の神を崇拜する宗教を指すので、古への猶太國民の宗教の如き是れである。猶太のエホバ神は猶太教、基督教、回回教に於ける唯一神崇拜の基をなしてをる。而して神を宇宙の創造者と考ふるのである。

(三) 汎神教

宇宙即ち神なり。萬物神ならざるはなしと考ふる宗教をさして汎神教又は凡神教といふ。佛教の如きは原始の時代には全く神を認めぬ無神教であつたが、後には眞如(しんにょ)といふ神とも佛ともいふべき實在が宇宙の根源であると共に宇宙は眞如を離れたものではない。簡單にいへば、宇宙萬有即ち是れ眞如なり、神なりと見るので、神は宇宙其の物なりといふ思想があらはれて、多くの

宗派の根本觀念となつた。故に佛教は概して汎神教の中に入れる事が出來る。但し佛教中でも淨土教諸宗の如きは阿彌陀佛一體を崇拜するのであるから一神教といふべきである。

宗教の分類法は簡單にいへば、此の三分法で濟むのであるが、なほ自力教だの、他力教だの、偶像教だの、排偶像教だの種々に分類する事が出來る。併し一々の分類法に就いて說明するのは、短篇なる本書の許さぬところであるから總て略することゝしよう。

第三節　宗教の分布及び其の制度

世界の宗教は其の數甚だ多く、到るところに散布してをるのである。而してかつて其の國に起つた宗教が今は其の母國には跡かたもなく亡びて、却つて他の國々に盛んな奇觀を呈してをるものもある。例へば現今世界の二大宗教たる佛教と基督教の如きは左樣である。佛教は殆んど全く印度には見る影もなくなつて、其の他の東洋諸國に榮えて居り、基督教は古への猶太の地

には行はれないて、西洋諸國に隆盛を極めてをる如き有樣である。故に今主なる宗教が、世界の如何なる部分に行はれてをるかを大略說明してみよう。

(一) 儒教

儒教はいふまでもなく、其の起つた支那を中心として、朝鮮、及び我が國に行はれてをるが、宗教としてよりも一種の倫理思想として廣く行はれてをる。我が國では德川時代に孔子の廟を江戸の湯島に建てゝ、大學頭が毎歲祭典を行うてゐた。

(二) 道教

是れも儒教と略同じ範圍に行はれてをる。而して我が國に於いては儒教が幾分宗教の形に於いて行はれてゐたに反して、道教は殆んど全く一種の哲學思想として行はれて居た。

(三) 波羅門教

(四) 猶太教

此の二教は國民的の宗教で、前者は印度人に限つた梵天を拜し、後者は猶太人

に限つた耶和華を拜むので、世界的の宗教ではない。故に其の行はれた範圍も印度及び猶太に限られてをる。波羅門教は今日印度教と呼ばれて、印度に猶太教は世界に散在してをる猶太人の間に行はれてをる。

(五) 佛教

佛教は今印度には殆んど行はれず、支那、印度支那、遲羅、朝鮮、日本に行はれ、其の西藏に入つて來た喇嘛教は西藏、蒙古、滿洲、支那本部等に行はれてをり、露西亞本國及び西比利亞の一部にも行はれてをる。

(六) 基督教

歐米諸國に盛んに行はれ、白人種の勢力と共に世界の各地に行はれてをる。其の分布の範圍は諸宗教中最も廣い。

(七) 回回教

アラビア、トルコ、支那の南部、印度等に行はれてをる。就中トルコ、印度最も盛んてある。

(八) 波斯教

波斯印度に行はれてをる。

さて次に是れ等の宗教の信徒の數はどの位あるてあらうか。固より宗教は精神上の事てはあるし、統計のないところも多いから、正確に其の數を知る事は望むべからざる事てあるが、其の概數は計算した人がある。今參考のために リス、デヴィッ氏の統計表を掲げてみよう。併し此の計算とて、唯漠とした概數に止まる事を忘れてはならぬ。

拜火教徒	一五〇、〇〇〇人
猶太教徒	一、二〇〇、〇〇〇
基督教徒	三二七、〇〇〇、〇〇〇
波羅門教徒	一六〇、〇〇〇、〇〇〇
回回教徒	一五五、〇〇〇、〇〇〇
佛教徒	五〇〇、〇〇〇、〇〇〇

（世界の人口は凡そ十五億とす）

さて次に宗教制度を極簡略に述べて置かう。凡そ宗教制度には二種ある。

一は即ち宗教内の制度て、他は國家の宗教を遇する制度てある。前者は宗制又は教會制度て、多くは一宗に主長たる法王又は管長があつて、世襲又は選擧制度を採り、其の下に宗會があり、宗務僧があつて、一宗の行政立法司法教育等を司つてをる。後者には種々の制度があるが、主なるものは國教制度と自由制度てある。國教制度とは一種の宗教を定め、其國の臣民は皆其の宗教を奉ずる義務がある制度をいひ、自由制度とは、國民に信教の自由を與ふる制度を指すのてある。又此の兩制度の間に立ちて、或一定の宗教にのみ保護特典を與へてをる制度もある。現今國教制度の國は露西亞（希臘教（耶蘇教の一派）、トルコ（回回教）、遮羅（佛教）等て、其の他の文明國は一般に自由制度を採用してをる。我が國の如きも、憲法に依つて信教の自由を保障してゐるのてある。

第三章　儒教

第一節　孔子

孔子は支那の聖人であるのみならず、實に又日本の聖人と稱すべき偉人である。孔子の教は之れを儒教と稱して、宗教の一派とはなすものゝ、我が國に於いては、古來修身齊家の道一に其の訓誨を遵守し、佛教家も神道家も、其の多くは佛を奉じ、神を說く傍、孔子の信者であつた。孔子の教が支那三千載思想の根柢規範たりしと等しく、我が倫理思想の要部を占め、主潮となつてをつた事は何人も疑はざるところであらう。其の言は經となりて千載の法を垂れ、其の行は發して百代の儀表となる。孔子の如きは實に東洋の聖師と稱すべきである。

孔子名は丘字は仲尼、其の祖先は殷の後で宋に居つた。此の時始めて孔氏といふ姓を名乘つたが、數世の後宋に滅さるゝの悲運に會し、魯に移り住む事となつた。かくて叔梁紇の代に魯に仕へて大夫となり、晩年顏氏の季女徵在

を娶り、尼山に禱りて孔子を產んだ。處は昌平鄕の地で、實に周の靈王二十一年であつた。幼時遊ぶ時にも、常に俎豆を陳ねて、儀式の眞似事をして樂むのが好きであつたと傳へてをる。長じて季氏の役人となつたが、料量平にして人望があり、次いで司職の吏となつて牛羊の監督となつた時も、畜類がよく蕃殖した。かくて壯歲の時に周に適き、禮を老子に問うた。此の頃から漸く門人も出來る樣になつたが、會々魯國が亂れたので、難を齊に避けたが、齊の景公が孔子を迎へて、政を問ひ、尼谿の田に封ぜんとしたが妄嬰に拒まれて成らず季孟の地に封ぜんとしたので、孔子は魯に歸られた。時に魯に定公位に即き、孔子を用ひた。かくて孔子は中都の宰から、司空、大司寇と進み、定公を輔けて、齊の景公と夾谷に會見したが、齊の景公は定公を脅かさんとするので、孔子之れを叱斥して、無事に濟む事が出來た。齊は大いに孔子の雄威に懼れて、前に奪うてゐたところの土地を魯に返した。時に魯の三家互に權を爭うて、王室日に式微するので、孔子は王室復興の策を建て、三都攻落の計を盡し、二城を陷れたが、一城は之れを固んで克たなかつた。孔子は此の間に

於いて、魯の相となり、亂臣の少正卯を誅し、三箇月にして治績大いに擧つたが、齊人は之れを聽いて恐れ、季桓子を誘惑したので、政治が亂れた。孔子遂に魯を去り、衞より將に陳に赴かんとしたが、匡人はかつて季氏の臣陽虎の暴すところとなつてゐたので、復讐の念を有つて居た。然るに禍なる哉。孔子の容貌が陽虎に似て居る所から、匡人は孔子の徒を圍んだ。孔子は泰然として、「天の未だ斯文を喪ぼさざる、匡人吾れを奈何せん」と、唱へられたが、陽虎にあらざる事が分つて、圍解け、衞に反り、曹にゆき、宋に適き、弟子と共に大樹の下に禮樂を習うて居たが、桓魋なる者が其の大樹を伐倒した。此の時にも毅然として、「天の德を我れに生ずる、桓魋其れ吾れを奈何せん」と叱せられた。夫れより、鄭、陳、衞、葉、蔡等諸國の間に流浪し、昭王の招に應じて楚に向はんとされたが、陳蔡兩國の大夫は孔子の楚に用ひられん事を恐れ、兵を出して、孔子及び其の徒を野に圍んだ。此の時は事急に出てたので、孔子も嘆じて、「詩にいふ。兕にあらず虎にあらず、彼の曠野に率ゆ。吾が道非なるか。吾れ何すれぞ是に於いてするる」と言はれた。子貢之れを聞いて、「夫子の道至大なり。天下能く容るゝな

し」と叫び、顏回は「容れざる何ぞ病まむ。然る後に君子を見る」と勵ました。楚の昭王傳へ聞いて、兵を興して孔子を迎へたので、孔子は楚に適かれた。昭王封ずるに書社の地七百里を以つてせんとしたが、令尹子に拒まれて志を達せず、孔子は空しく衞に反る。季康子魯に迎へ歸らしめ、哀公政を問うたが、遂に用ゆるに至らなかつた。是れより專ら志を學事に用ひ、唐虞以來の古詩を刪定して三百五篇となし、之れを絃歌諷誦して、禮樂の用に供へられた。今の詩經即ち是れてある。晩年は易を喜び、常に手卷を解かず、韋編三たび絕つと傳へられ、繫辭傳等を書き加へ、更に魯の史記に據つて、春秋を作り、大義名分を明にし、隱公より哀公に至る十二公、筆を獲麟に絕たれたが、亂臣賊子之れを見て大いに懼れた。弟子三千人、身六藝に通ずるもの七十七人、周の敬王四十一年歲七十三にして卒せられた。

孔子の時代は周室大いに衰へ、春秋の亂を經て戰國の時に際し、十二諸侯互に相攻伐して、名敎に耳を傾くる隙なき干戈の時代であつた。從つて聖人の道行はれず。孔子の如き聖哲も南船北馬、東西に苦み、殊に陳蔡の間に餓えん

とせられた如きは其の最大なる迫害である。孔子も天を仰いで「我が道行はれず、桴に乘つて東海に浮ばん」と嘆息された。其の人格は渾然として追隨を許さない。其の一代を說いて「我れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ひ、七十にして心の欲する所に從ひ、矩を踰えず。」といはれたのを誦すれば、一個自强不息の勇猛兒、雍々神の如き古聖の面影が髣髴として、築前に顯現し來るの感に堪へないのである。孔子は實に支那の「第一人」である。

第二節　儒教の經典

儒教には四書五經の目がある。而して四書は最も尊ばれて、儒教の經典金訓となり、就中論語を最も重しとする。五經は孔子の筆削編成するところの古書である。今先づ五經の解題を說いて、四書の說明に及ばうと思ふ。

(一)　五經

五經とは詩經、書經、易經、春秋、禮記の五部を總稱した名稱である。

(イ)　詩經　傳によれば、元三千餘篇の詩を含んで居たのであるが、孔子が道德上の見地から取捨選擇して三百五篇を採錄された。本書の內容は當時世に行はれてゐた朝廷の雅頌から民間の俚謠に至るまで、思邪なき作を、風、賦、比興、雅、頌の六體に分ちて、排列したものである。

(ロ)　書經　一に尙書と稱し、支那最古の歷史である。此の書は支那根本の政治思想及び倫理思想を含んでをるので、最も重要なる書典である。之れに今文尙書と古文尙書の二種がある。今文は二十九篇漢の伏生二十八篇を傳へ、一篇は後河南より得て、今に遺つて居る。古文は漢の景帝の時孔安國孔子の故宅より得たと傳へてをる。

(ハ)　易經　傳によれば、伏羲始めて八卦を畫し、文王之れを六十四卦となし夏殷周三代の時に至つて、三易が出來た。三易とは連山(夏の易)、歸藏(殷の易)、周易(周の易)の三種を指すのである。然るに連山歸藏の二易は散佚して、今は周易のみ遺つてをる。周易は一時に出來たのではなくして、家辭は文王の作、爻

辭は周公の作、而して十翼は孔子之れを作るといふが、普通の說てあるが、十翼が果して孔子の作なりや否やに就いては、異說があつて、一定せぬのてある。

(ニ) 春秋　第一節に說いた如く、一篇の歷史てある。

(ホ) 禮記　四十九篇より成る。古代の禮を記せるもので、孔子門人と講ぜられたのを記錄して傳へたのだといふ事てある。秦の焚書の時に散佚したが、漢の時に現れた。戴德が傳へたのを大戴禮といひ、戴聖が傳へたのを小戴禮と稱する。後者は今の禮記てあるが、眞僞は明かてない。或は後儒の僞作といひ、或は古本の殘闕だといふ說もある。

其の他に樂經といふものがあつて、前五經と合せて、六經の名があつたとも傳へてをる。

(二) 四書

書とは大學、中庸、論語、孟子の四部をいふので、儒敎の根本經典てある。大學庸の二書は固と禮記の中の二篇てあつたのを、宋の代に河南の程子が禮記から拔いて二部の書となした。朱子に至つて、以上の四部を四書と稱して、儒

門の金誠となつた。

(イ) 大學

一小篇て、孔子の遺書として傳へ、初學の入門書てある。

(ロ) 中庸

孔子の孫子思の著と稱せられてをる。孔子の子鯉字は伯魚早世し、孫の汲字は子思が孔子の門人曾子から學を受けたのてある。子思の傳は明かてないが、諸方に流浪し、衛に居つた時に、田子方が狐白裘を贈つたが受けず、六十二歲の頃宋に適き、樂朔に圍まれ、其の間に中庸を作り、晩年に魯に歸り、穆公の師となつたと傳へられてをる。中庸は組織的に儒敎を簡明に說いた珍重すべき一小篇てある。

(ハ) 論語

論語は孔子の言行を錄した儒門最要の經典てある。其の編成については種々の說があつて、曾子有子の門人が錄したのてあるといひ、或は子游、子夏の徒之れを集むと傳へ、或は門人相集まりて之れを編成したと稱して居る。孔子

の言行の間にまゝ門人の言が雜つてをる。其の論語と稱する理由は、那邊が疏に「論者綸也、輪也、理也、次也、撰也、以此書可以經綸世務、故曰綸也。圓轉無窮、故曰輪也。蘊含萬理、故曰理也。篇章有序、故曰次也。群賢集定、故曰撰也」。と解し、劉勰は「昔仲尼微言、門人追記、故仰其經目、稱爲論語」。蓋群論立名、始於茲矣」と釋して居る。

論語には三種の別がある。

(A) 魯論　魯の論語て二十篇より成つてをる。

(B) 齊論　齊の論語て二十二篇より成つて居る。

(C) 古論　孔家の壁より出てた論語て、篇數は二十一篇てある。

普通に吾れ吾れの論語と稱してをるのは、十卷二十篇の魯論の形のものてあるが、其の內容は種々に異つて折衷的のものであるといふ。

(三) 孟子

總て七篇、或は孟子の自作といひ、或は門人萬章、公孫丑等の先師の言行を錄するものといふ說もある。孟子名は軻、字は子車又子輿といひ、其の生卒の年月

は明てない。或はいふ。周の安王十七年に生まれ、同赧王三十三年に卒す。年八十四と。孔子歿後百餘年に鄒に出て、業を子思の門人に受けたと傳へられてをる。當時邪說橫行、諸侯皆利に奔つて居たので、孟子は諸侯を遊說して、盛んに仁義を說き、楊子墨子の徒を排擊して、孔子の道の終に行はれざるを知り、門人を敎へて餘生を了へた。

(四) 其の他の經典

其の他の經典には孝經、孔子家語、孔叢子等がある。後二書は、幾分眞を含んでをるが、要するに僞書てあつて採るに足らぬ。

孝經の編者に就いては、古來種々の說があるが、司馬溫公は「孔子與曾子論孝、而門人筆之、謂之孝經」と說いてをる。秦の焚書の時に滅び、漢の時に現れた。今文孝經と古文孝經との二種がある。

第三節　儒教の敎義

儒敎は孔子に其の基礎を得、子思に醇熟し、孟子に大成した。故に其の間敎

說の變化發展があつてをるから、孔子の敎說と、子思の敎說と、孟子の敎說とは幾分の差異がある。從つて儒敎を明にするには、少くとも此の三子の思想をたどる必要があるが、今は極めて大體を說くのであるから、孔子の敎說の一斑を述ぶるに止めて置く。

孔子敎說の大本は仁である。仁とは字の示してをる樣に二人の義である。即ち人は個々獨立のものでなく、互に關係してをるものである。之れを今日の言葉でいへば、社會は有機體である。個人は個人としては存在する事は出來ぬ。必ずや他人と關係して始めて存在する事が出來る。從つて其の間の關係を規定する事が必要である。仁は信じ愛するの義で、道德の本源である。原理である。此の仁を君臣の間に行へば、忠となり、父子の間に行へば孝となり、夫婦の間に行へば別となり、兄弟の間に行へば悌となり、朋友の間に行へば信となる。斯くの如く仁は廣大なるものであるから、仁は之れを說明する事は甚だむづかしいのである。從つて孔子も弟子の仁を問ふに答へて、其の人相應に種々の答をしてをる。是れはつまり仁が非常に廣大の德であつて、言

語のよく說き盡すところでないからである。孔子がかつて弟子の曾參を呼んで「參乎吾道一以貫之」と敎へた。而して曾參は之れを解して「夫子の道は忠恕のみ」といつてをる。忠恕とは何であるか。曰く「自れの欲せざるところ之れを人に施す勿れ」である。然れば忠恕も畢竟信じ愛する事に外ならぬ。即ち孔子一貫の道は忠恕即ち仁である。忠恕とは廣大にして說き盡し難い仁を平易にわかる樣に說いたのであつて、別に變つたものではない。而して仁は人の一時も離るゝ事の出來ぬ德ゆゑ、之れを道と稱するのである。道とは離るゝ事の出來ぬもので、離るべきは道と稱するに足らぬ。造次も此に於いてし、顚沛も此に於いてすべき天地の大道である。而して仁を得るは、甚だ難かしいかといふに强ち左樣でない。何人も力を用ひて得ようとすれば出來るので、「仁遠からんや。吾れ仁を欲すれば仁此に至る」と說いてある。併し仁全體を得る事即ち仁を其の身に體し、仁と合一するのは甚だ難かしい。仁を體認したる人は儒敎の理想たる聖人是れである。「心の欲するところ矩を越えぬ」人換言すれば、別に力を用ひず勉めずして、其の行ひが道德と一致する人、即ち道

德上に自在を得た人を聖人と稱するので、聖人となる事は凡人の企て及ばぬところである。禹湯文武周公孔子は之れである。從つて通常の人の理想とするには餘り遠く高い。故に孔子は更に第二段の理想を建てた。これ即ち君子である。君子とは學問あり、趣味あり、品性あり、德行ある人を指すので、現今の言葉でいへば、人格の完全に發達した人の意味である。

孔子は既に說いた樣に、何人と雖も、仁を欲して、努力勉强すれば、仁を得る事が出來るといはれたのをみれば、人の性は善てある事が朧氣に述べられてある事がわかる。故に孔子は「性相近く、習へば相遠し」と教へ。何人も勉强して修養すれば、相當に發達する事を認めてをる。併し孔子も人には三等の階段がある事を認めて、上智の人と、中根の人と、下愚の人とした。是れ等の言葉が後に發達して、孟子の性善說、荀子の性惡說、韓愈の性上中下三等の說となつたのである。

さて仁を得、君子となるには如何にすべきであらうか。孔子は道德を行ふには智識がなくてはならぬ。即ち無智の者は實際は惡なる事をも之れを善

と思うて行ふ樣な間違を生ずるから、先づ學問をせねばならぬといふ事を說かれた。而も君子たるには學問だけては出來ぬ。之れと同時に行動云爲の外面的修行を要する。之れ即ち禮である。禮を完全に守るには己に克ち、愼み省みるところがなくてはならぬ。既に學問を修め、禮を修むれば夫れて足る樣なものゝ、なほ必要なものがある。つまり此れ等は君子の實質であるが、君子たるには更に文即ち人格の光が必要である。そこて、人格の光を養成するには詩と樂とを修めねばならぬ。即ち美的感情を修養せねばならぬ。斯く人格の質と、人格の文とが共に整うて始めて、君子が出來るので、孔子は深く偏する事を忌み嫌はれた。

斯くの如く、孔子は一方に偏するのを戒めて、實行上の法則を與へられた。是れ即ち中庸である。中庸とは過不及なきの意で、適度といふ事になる。人は實行上適度に、過不及ない樣にせねばならぬ。

孔子は道德と政治との根本を同一視した。故に政治の根本は個人個人が道德を修むる事にある。一身修まりて、一家立ち、一家修まりて、一國太平を得

るのである。故に天子は先づ其の德を修めねばならぬ。政治は正てある。必ずや名分を正さねばならぬ。名分を正すとは如何にすべきか。唯人々各々其の分を盡す樣にせねばならぬ。即ち君は君たり、臣は臣たり、父は父たり子は子たり、夫は夫たり、婦は婦たり、各其の分を盡せば天下は泰平に治まるのてある。故に大學に曰く、「古の明德を天下に明にせんと欲する者は、先づ其の國を治む。其の國を治めんと欲するものは、先づ其の家を齊へんと欲するものは、先づ其の身を修む。其の身を修めんと欲するものは先づ其の心を正しくす。其の心を正しくせんと欲するものは、先づ其の意を誠にす」。斯く先づ近い方から修めて行けば、心正しく、身修まり、家齊ひ、國治まり、天下平になるので、此の故に「天子より以つて庶人に至る、一に是れ皆其の身を修むるを以つて本と爲す」。孔子は仁を說かれたが、仁は一面に於いて一視同仁即ち、博愛てあるが、孔子は無差別的に愛を說かない。孔子の博愛は差別的てあつて、先づ近い者から遠い者に及ぼすので、其の父を愛して、然る後他人の父に及ぼす愛てある。是れ孔子が極めて其の敎說を常識的に建てられた

特徵てある。後に孟子は此の思想に基いて、大いに墨子の無差別的兼愛說を排斥した。

なほ、孔子は天命の犯すべからざるを說き、易に於いて、宇宙生成の理を說かれたが、根本の思想は以上說いた通りてあるから、これを略して置く。

第四章　道教

第一節　老子

凡そ支那には古來思想界に二大潮流があり、逕渭紛糾以つて、三千年の漲溢を來した。其の一は北方の思想を代表し、其の二は南方の思想を代表し、一は質實適切、他は幽遠高妙、前者は儒教て、後者は老莊てある。而して儒教は現象界の事に專て、倫理を說き、老莊は本體に着目して、哲理を講じた。老莊は之れを道家と稱し、後人の附會に依つて一種の宗教と化し、鍊金術を修め、長生不老を致すべしと考ふるに及んて、道家の祖たる老子の如きは、其の徒から神仙視せらるゝに至つたのてある。

道教の祖は、五帝の中の黃帝に歸するものがあるが、明てない。老子の時代には、多くの隱遯者があつて、老子と、頗似の思想を抱いて居る者があつた事は否定されぬ事實て、老子も此れ等隱者中の龍象てあらう。道家の系統を一言すれば、老子から關尹子に傳へ、夫れから廣まつたので、文子、蝉子、列子、莊子以下、

漢書の記すところに據れば、三十七家、著書九百三十八篇の多きに上るといふ事てある。以つて此の派の盛んてあつた事が分るてあらう。

老子姓は李、名は耳、字は伯陽と稱し、楚の苦縣の人てある。或はいふ。名は重耳、字は伯宗と。又いふ。名は志、字は伯光、聃と號すと。而も詳細の傳は明てない。史記には、孔子禮を老子に問ふとあるのを以つてみれば、孔子より稍先輩てあつた樣に思はるゝ。老子も、釋迦も、孔子も西紀前五六世紀の人と見れば大過ないのてある。老子かつて、周の史官となつたが、時勢に慨するところあつて、隱遯の志深く、靑牛に騎して、散關に行き、將に世を捨てんとした。其の時關令尹喜子に其の學の大綱を記さん事を請うたので、道德經を著したと傳へられてをる。其の他の事は一切分らぬのてある。

後世の道家者流尊んて太上老君と呼び、唐の代に至り、其の姓が李てあるところから、同じ李氏なる老子を其の祖先と尙び、老子と稱し、太上玄元皇帝の尊號を贈つた。

第三節　道教の經典

前にも述べた樣に、老子の說は純然たる一種の本體論て、宗教てはなかつた。列子も、莊子も亦左樣てある。故に其の後數百年、道家の末徒が、老子を神仙視し、老子の敎を以つて、一種の神祕敎となすに至つて、道家は全く卑俗淺薄なる宗敎と化したのてある。從つて、此の宗敎の根本經典たのてある。從つて、此の宗敎の根本經典は老子の道德經てあるが、其の鍊金術的宗敎を最も善くあらはしてをる實際上有力な經典は抱朴子てある。故に今は純理の方面の著作として、老子、列子、莊子を實際上の經典として抱朴子を解說しようと思ふ。なほ此の外に關尹子以下の末書の多い事は記憶して置かねばならぬ。

(1)　老子

詳には老子道德經といふ。凡て八十一章、唐の玄宗之れを分ちて、上篇を道經下篇を德經と名づけた。現今傳はるもの上下二篇八十一章の本てある。老子關令尹喜の求に應じて作るところ、散文て、時に押韻し、簡潔高古の文體て、上

篇に世界觀、下篇に人生觀を述べてある。而して篇名は上篇第一章に「道可道非常道云々」と見え、下篇第一章に「常德不德云々」の句あるに基くのてある。

(2)　列子

は列子の言を錄したもので、今本は八篇から成つてをる。列子は鄭に生まれ名は禦寇、其の事蹟は明てない。但し老子に後れて出てた事は疑を容れぬ。學を關尹子等に受けたと傳へられてをる。此の書は列子の自錄てなく、其の弟子の筆錄に係つたものてあらう。唐の代に列子を冲虛眞人と稱し、本書を冲虛眞經と呼び、宋に至りて、冲虛至德眞經と呼ぶに至つた。

(3)　莊子

は莊子の書てある。莊子名は周、字は子休、曹の水陽蒙縣の人、南華山に隱れたから、南華眞人の稱がある。孟子と同時代の人と傳へられてをるが、兩雄は互に相識るに至らなかつた。周博學宏識、學を關尹子の門人長桑公子及び子夏の門人田子方に承くといふ。曾つて漆園の吏となつた事がある。曹王に招かれたが仕へなかつた。周談論風生の雄辯家たると共に非常なる文章家て

あつた。寓言に巧に、筆端雲煙を生ずるの趣きがある。本書は內篇、外篇、雜篇の三部に分れ、內篇は七篇、外篇は十五篇、雜篇は十一篇を有し、通計三十三篇から出來てをる。此の書の眞僞に關しては、古來種々の說があるが、內篇は周の自作、外雜二篇は後人內篇の意を敷衍したもので、中に幾分周の作もあると見るが穩當であらう。

(4) 抱朴子

は晉の葛洪の作るところ、內篇四卷、外篇四卷、總て八卷、前者は二十章、後者は五十二章、總じて七十二章の書である。葛洪字は稚川、丹陽句容の人、葛天氏に出づと稱せらるる。洪は性來虛弱で、世に出てず、名利を忘れ、人生の夢の如きを思ひて、斯る浮世に空華の如き名譽を求めんより、名山に登りて仙術を修むるに如かずと考へ、遂に世を遁れ、神仙の術を得たと傳へられてをる。著すところ抱朴子の外、神仙傳十卷、隱逸詩十卷等がある。本書說くところは老莊の旨に外ならぬが、長生不死を得る道は一に仙丹を服するにありと敎へて、種々の仙藥を述べてをる。

第三節　道敎の敎義

(1)　宇宙の本體

孔子の說くところは多く倫理の法則であつたが、老子は先づ宇宙の本體を研究した。山あり、川あり、人あり、獸あり、雜然紛然たる宇宙は何處より生じたのであらうか。一見到底調和する事が出來ぬ樣に見ゆる森羅萬象も其の根柢は一てある。本體は一てある。而して此の本體は吾れ吾れの智識五官で認識する事が出來ぬもので、之れを無と名くる。無は斯く萬物の本體で萬物は一として無より發せざるはないから、是れ即ち道てある。老子は此の無又は虛無を或は玄牝と名づけ、或は谷神と呼んてをる。道は天地に先つて生じ、天地に後れて存するのてある。道は吾れ吾れの認識以上のものてあるから、之れを說く事は不可能てある。斯く說く事が出來ぬものを強ひて說明せんとするので、老子はいろいろに言ひ回してをる。或は夷にして希、即ち見れども見えず、聞けども聞えずといひ、無狀の狀、無象の象、即ち姿なき姿、形なき形と

形容してをる。斯る本體即ち無は爲す事なくして、萬物を發生し、世界を成すのである。而して無即ち道は萬物に周く行き渡つて居る。故に老子は、無爲にして爲さゞるなしと說き、周行して殆からずと述べてをる。斯くもいみじき道であるから、玄の又玄、衆妙の門と讃へてをる。之れを要するに、

(A) 萬物の根元は無なり。(宇宙の本體は無なり、

(B) 無は認識以上の實在なり。

(C) 此の本體は無爲にして宇宙を發生す。

の三項が、老子本體論の眼目である。

(ロ) 厭世と解脫

無が其の儘に止つて居た時は理想的の單純淳朴な時代であつた。然るに本體が有を生じ、分化が盛んになり世界が出來て、世が開化に趣くに從つて、爭ひが起り、混雜が起り、社會は面倒臭くなり、複雜になつて來る。從つて聖人なる者が出て來て、仁義禮智を敎へ、禮樂刑政の道を興す。世の愚かなる者共は仁だの、義だの、といつて有難く思つてゐるのであるが、焉ぞ知らん、太古純朴の

世にはそんなものは少しも必要はなかつたのである。世が開け、代が下るにつけて、人は巧智になり、風俗人情は輕薄になるのである。是れによつて觀れば、大道が廢れたので、仁義を說くものも起るのである。凡そ物は、必要なければ、出て來るものではない。仁聖人も出づるのである。義禮智の用があるのは、大道が闕けて、澆季の世になつた證據である。今の世は正に澆季の世である。國は國と戰ひ。人は人と殺し合つてをる。貨幣といふ物が出來て、人は金銀珠玉を貴ぶ樣になり。詐僞百出、救ふべからざるに至つたのである。而して斯る形勢は日に進んで止る樣子もない。斯る世は實に呪ふべき世である。厭ふべき世である。凡そ過去の時代に理想を認むる學派は必ず厭世觀を抱くに至るのである。老子は分化以前、世界發生以前の純一無雜の時代を理想としたので、其の結果として、開化し分化した世に對して、之れを厭ひ、嫌ふ情を起すのは免れざる必然の結果である。老子は斯くの如くに世を觀じ、之れを捨てゝ、山野に遁れたのである。

然らば、斯る世を脫して、純一無雜の世に還るのは、いかにすべきであるか。

老子は放任主義、退歩主義を採つた。聖人の說を廢し、一切の智を棄て、仁を止め、得難きの貨を貴ばないで、民を爭はしめる樣にし、斯くて嬰兒の狀態に復歸せしめる事が出來る。老子の理想的國家は無爲を以つて治むべきで、放任主義の國家である。故に曰く。「大國を治むるは小鮮を煮るが如し」と。其の世界は智なく、禮なく、仁なく、義なき純朴單調の原始的狀態である。故に吾れ等は名利の念を去り、慾望を斷ち、靜を守り、虛に還らなければならぬ。是れ即ち道家の至高善である。老子は其の理想鄕を描いて曰く、「小國寡民什佰の器あるも、而も用ひしめず。民をして死を重んじて、而も遠く涉らざらしめ舟輿ありと雖も、之に乘るところなく、甲兵ありと雖も、之れを陳ぬるところなく、人をして、復、繩を結んで、之れを用ひしめ、其の食を甘しとし、其の服を美なりとし、其の居に安んじ、其の俗を樂み、鄰國相望み、鷄犬の聲相聞え、民老死に至るも、相往來せず」と。以つて其の一斑を察すべきである。

老子の退歩主義は、進化が宇宙の眞理たる以上、確に背理である。一種の夢想である。其の仁を沒し、義を非とする復歸說も、無差別一片の本體を過重視

する餘り、現象界にまでも、無差別見を濫用した誤謬に基く事は明てある。併しながら、老子の說の幾分は當時の攻伐相踵ぎ、殺氣滿天の環象に刺戟せられた事は之れを認めねばならぬ。從つて、時に矯激の言說があるのは、又時代思潮の濁浪に對する熱情の餘憤として之れを寬假せねばならぬ。

なほ、老子は一面に於いて、快樂主義を唱へ、一面に於いて、權謀術策を說いたところがあつて、後の揚家の快樂說や法家刑名家等の權謀縱橫說に根據を與へてをるが、此れ等は道教なる宗教的方面に關係が少ないから、本書には省略に從ふ事とした。

(ハ) 神仙と錬丹

道家の宗教的方面、詳しくいへば、老莊の說が後來發達して神仙教となつた。即ち道教の特色は神仙術にある。從つて道教にとつては以上の理論的方面よりも、寧ろ此の卑俗神祕的方面が重要てある。道教の道教たる所以は、本體論にあらずして、寧ろ、長生不死を欲する俗情に、老莊の說を附會して、丹を服し、山に隱れ、以て神仙たらんと希求した方面にあるのてある。故に今は斯る宗

敎意識を發展させるに至る契機が老莊の說の那邊の部分に伏在せるかを稽査し、併せて、神仙術の一斑、錬丹術の概略を抱朴子に據つて、略敘しようと思ふ。

物欲を忘れ、虛無自然に一致した賢者は道家の理想的人格である。之れを眞人といひ、至人と名づくる。莊子は斯る眞人の精神狀態を譬喩的に說いて曰ふやう、藐姑射の山に神人ありて居れり。肌膚は冰雪の如く、淖約として、處士の如く、五穀を食せず、風を吸ひ、露を飮み、飛龍に御して四海の外に遊ぶ。其の神凝りて、物をして疵癘せしめず。年穀をして熟せしむ」と。又曰く、「之人や、物之れを傷る事なく、大浸天に稽れども、溺れず、大旱に金石流れ、土山焦るれども、熱せず。是れ其の塵垢粃糠も、將に猶ほ堯舜を陶鑄せんとするものなり」と、又曰く、「至人は神なり矣。大澤焚くれども熱する能はず、河漢沍れども寒ゑしむる能はず。疾雷山を破り、風海を振けども、驚かす、能はず。然る若き者は雲氣に乘じ、日月に騎りて、四海の外に遊ぶ。死生已に變ずるなし、而も況んや利害の端をや」と。

右の樣な誇張的說明が後には、事實的に解せらるゝ樣になり、實際霞を吸ひ

雲に乘る、不老不死の仙人と仙鄕と、之れを希求する念から、長生の仙藥を尋ぬるに至つたのである。要するに、長生不老を欲する人間の欲情が、老莊の譬喩的說明に附會して、神仙術を生み出したのである。

而して、斯る傾向を助くるに有力であつたのは、漢代の淮南子て、大成者は晋代の葛洪てある。

葛洪は神仙の存在を信じ、丹を服して、修行すれば、斯る自由自在の境に至る事が出來ると敎へた。彼れの說に據れば、斯る神丹の法は、老子の師元君の創むるところて、其の著太淸觀天經九篇に示してある。九篇の中上三篇は敎ふる事は出來ぬ書て、中三篇は傳を失し、下三篇は丹經と稱して三卷あるが、其の中に正しく神仙と神丹の法を說いてある。固より一顧の價値もないが、此の病的宗敎の症狀を示すために、左に摘記してみよう。

(甲) 神仙に三つの階級がある。即ち、

(一) 天官　上士の道を得たる者。

(二) 崑崙山の神仙　中士の道を得たる者。

(三) 長壽　下士の道を得たる者は此の世に長生する。

(乙) 神丹にも數種ある。即ち

(一) 丹華　三年服すれば、仙人に爲れる神藥。

(二) 神符　二年服すれば、仙人に爲れる神藥。

(三) 神丹　一年服すれば、仙人に爲れる神藥。

其の他、餌丹、鍊丹、柔丹、伏丹、寒丹等の妙藥があつて、此れ等の藥を服すれば、半年乃至最も短いのは三日間て、仙人に爲る事が出來るのてある。唐盡に仙人の多いのを觀、又史書に、列仙傳等があるのを見れば、いかに、斯る仙術が支那の上下に行はれたかゝ分るてあらう。宗教の病疾も此に至つて、極まつてをるのてある。

第五章　波羅門教

第一節　印度民族の神話と波羅門教の起原

印度アールヤ民族は太古の時代に西方亞細亞の高原地方から、波斯人と共に段々東南へ遊牧しつゝ移轉して來たが、遂に印度に侵入し土民と戰うて之れに克ち、部落の形をなすに至つた。これは今の印度河（インダス）の畔てあつた。

其の頃は全く牧畜の民てあつたが、漸く落付いて來ると農業をはじめた。かくて、印度アールヤ民族は淳朴な風て暮して居つたが、元來印度は熱帶の地て、樹木鬱蒼として繁茂し、河流は網の如く縱橫に流れ、夏の雲や、秋の雲、或は驟雨車軸を流し、或は暴風が椰子の葉を裂く等天然の變化が夥しい、のみならず彼等は斯る天然現象に大關係を有してをる牧畜や農業の民てあるので、其の晴雨が彼れ等の收穫や幸福に係る所が著しい。例へば數頃の枯草がよく乾いてゐても、驟雨忽ち降つて塞なしにしてしまふ事もあるし、稻の穗が今や白い花をつけ、田から田にゆかしいかをりを送つて、來ん秋の實りを囁いてゐて

も一夜の嵐に半歳の苦勞を無にする樣な事も起る。況んや雲の姿の恐ろしきを見るにつけ風の力の勁々を思ふにつけ、彼れ等には雲や風は恐ろしい神樣とみえたのである。斯くて、蒙昧な印度アールヤ民族は一々の天然現象を神として拜する樣になつた。

彼れ等の拜し敬し怖るゝ神々は澤山あるが、宗教學者は通例之れを

(一) 天上の神
(二) 空中の神
(三) 地上の神

の三つに區分する。

此れ等の神には曙の光を神とみたウシャス神、明星を神とみたアシュヰン神、太陽を神とみたスーリャ神、同じくザヰタル神、大空を神とみたヰシヌ神等があり、其の他驟雨暴風の神なるインドラ及び其の部下の風雨諸神、地に燃ゆる火なるアグニ神等其の數は甚だ多い。蒙昧にして無邪氣な太古の民族は此れ等の神々にソーマの樹を石臼で絞つたソーマの酒を注ぎ、牛酪を捧げて

家畜の繁殖、五穀豐饒、一家一族の好運安全を禱り、美しい讃頌を歌つて大いなる神を讃した。家長は毎朝爐のほとりで神に禱つたのである。

此れまでは唯一々の天然現象を神として禮拜祈禱し、神と神との間に別に上下優劣の區別はなかつたが、後に至つては、漸次に威力の強い神々、又彼れ等の家畜や農業に多大の關係ある神々が他の神々よりも一層怖れられ、尊敬される樣になつた。故に多くの神を拜しながら、其の中殊に偉い神樣を特に尊ぶ樣にする。即ちインドラ神とかアグニ神とか非常に尊敬さるゝ樣になつて來た。斯くて、此れ等の大いなる神々を拜し禱る時には其の一つの神に專心誠意を注いで其の他の多くの神を忘れ、又他の場合に他の大神に祈る時には、其の神以外の大小神祇は一切心に置かずに一向專念に信仰するのである。故にこれまでは多神敎であつたが、今度は一神敎の形をとる樣になつてきた。併し一神を拜しても敢て其の神以外の大小神祇の存在を拒まぬから一神敎とも多少趣を異にしてをる。宗敎學者は斯る宗敎を單一神敎と稱して、一神敎と區別する。又祈禱の目的と場合とに依つて、其の一向專念に拜む大神が

同一てない、時々變るから、交替神教とも稱する。

後には、一向專念に祈禱を捧ぐる大神の中にも、殊に威德廣大なる神があらはるゝ樣になつた。而して此の神は世界の創造者であり、萬物の保護者であり、人間の祖先と考へらるゝに至つた。梵天（ブラフマ）即ち是れてある。この梵天が波羅門敎の大神となり、梵天を拜する宗敎が起つた。印度神話に於ける一切作者全能者全智者たる梵天の出現は、今日吾れ吾れのいふ波羅門敎の起原てある。即ち波羅門敎ては梵天を人格ある神として崇拜するのてある。

第二節　波羅門敎の經典

波羅門敎はいつ頃起つたのてあるか。太古の事は如何なる國も邈として分らない。學者の推算によれば今より少くとも三千年以上の古代に起つたものらしい。故に先づ非常な太古に出來たのだと考へてゐれば宜しいのてある。

然らば次に、波羅門敎は如何なる經典を有して居るか。波羅門敎には多くの經典と注釋とがある。而して其の主なるものは四種の經典てある。換言すれば四種の吠陀（ヴェーダ）てある。吠陀とはもと神智の義て、「神の啓示」といふ程の意味てある。神が聖人賢者に直接に告げ敎へたものだと信ぜられてをる。從つて、人間の手に出來たものてないと譯となるから、波羅門の徒が、此れ等の經典を尊ぶ事は實に驚くべき程てある。一切の智識の眞僞は此れ等の神典に合するか、合せぬかて判定する位てある。今其の四吠陀とは、

(一) リグ吠陀
(二) シャーマ吠陀
(三) ヤジュル吠陀
(四) アタルヴ吠陀

の四種の經典てある。今少しく說明を加へよう。

(一) リグ吠陀

はもと印度アールヤ民族が印度河（又信度河）の畔に遊牧して居た時代から、漸次ガンジス河の溪谷の方へ進んて來た時代、即ち天然現象崇拜時代に天然現象の

偉大に驚き、其の崇高を仰いで、大いなる神々の威力を讃美した時の讃美歌を集め録したものである。此の時代には前に述べた様に、家々の家長が爐の邊りに神を禱つた外に、既に複雑な祭式が出來て、夫れを行ふ專門的の家族が出來た。即ち司祭の家である。其の司祭は各々家傳の讃美歌を以つて、當時の首長に仕へてゐた。此れ等の讃美歌を後に編纂したのがリグ吠陀十卷である。即ち其の崇拜する神々の威德を歌ひ、一家一族に惠を垂れ給はん事を祈請した讃歌である。十卷に集められたるもの一千〇十七スークタ(章段)の多數に上つてをる。これが後に波羅門敎に採用されて、同敎第一の經典となつたので、種々の注釋が出來た。

(二) シャーマ吠陀

リグ吠陀の第八卷、第九卷の兩卷に基いて、祭祀に當つて歌ふために作つたものである。

(三) ヤジュール吠陀

シャーマが歌詞であるに對して、これは祭祀の時に用ゆる呪文や祭詞を集めたもの、我が國の祓詞の様なものである。共に散文で出來てをる。

これに

(イ) 白ヤジュール

(ロ) 黑ヤジュール

の二種の集録がある。

(四) アタルヴ吠陀

これはリグ吠陀よりも後に出來たので、祭祀祈禱に用ゆる呪文を集めたものである。

以上四吠陀の說明を終つたが、波羅門敎の經典はこれだけかといふに決して左樣でない。此の外の重要なるものが二種ある。即ち、

(一) ブラフマナ

(二) スートラ

是れてある。

(一) ブラフマナ

前の四吠陀の讃美歌、呪文、祭祀の儀式に關する説明解釋であつて、吠陀の奥妙神祕なところを説明し、解説したものである。これも其の祭司の家々に傳はつた傳説や説明を集めて編纂した事はリグ吠陀の如くである。ブラフマナにはリグ吠陀を説明したのや、ヤジュール吠陀に基いたのや數種あるが、今は一々擧ぐる事を略する。

(二) スートラ

此れは律法又は敎條ともいふべきもので、後には純然たる法律の形をなし、政治も之れに依つて行はるゝ樣になつた。學者の研究に依れば、ブラフマナが出來てから八百餘年の後に出來たといはれてをる。波羅門族は初め祈禱祭祀の事は細大となく專門に行うてゐたが、其の外に民間の俗信や、家庭鄕閭の習慣があつて、廣く行はれてゐた。例へば誕生の儀式とか、結婚の儀式の如きてある。故に波羅門族が漸次勢力を得る樣になつてからは、此れ等の俗信儀式をも宗敎の一部として行ふ樣にし、其の規定條項を一定して、人民の據りどころとなした。之れが即ちスートラてある。これも亦家々や地方によつて

多少異つてゐたので、數種のスートラがあらはれたが、就中マヌといふ家族の家傳に基いて出來たスートラが段々完成して、遂にマヌ法典と呼ばるゝ樣になり、波羅門敎の憲法となり、波羅門敎は律法的宗敎となつた。

第三節 波羅門敎の社會制度

マヌ法典が大成してから、波羅門敎は隆盛の度を極め、其の法典に據れる社會制度は實行せられ、婆羅門敎といふ宗敎は啻に精神界を支配するのみでなく、小は家庭の瑣事から、大は國家の政治、人民の刑罰に至るまで一に此の法典を適用する事となつた。此に於いて波羅門敎は社會を支配する根本となるに至つた。今マヌ法典に基く社會制度の一斑をお話しよう。

此に注意すべきは一家の家傳たるマヌ法典が如何にして全印度の民族の行爲を支配する力を得るに至つたか。換言すれば、一家傳の規定がいかにして多數人民の行爲を拘束する力を得るに至つたかといふ事てある。何故に人民はマヌ法典の規定には甘んじて服從するに至つたかといふ事てある。

マヌ法典の大成以前には前に述べた通り、各家各地方に異つたスートラがあるし、又久しく家々に傳へて居る中に、段々複雑になつて來て、其の何れに從ふべきかは專門の智識がなくては分らぬ樣になつた。此に於いて、スートラの統一を希望する專門家が多くなり、マヌ家の家傳を骨子として諸のスートラを統一大成したのが、謂はゆるマヌ法典である。蓋し印度ではマヌは人間の祖先と考へられて居るので、此の法典はマヌが其の子に傳へた法典であるといふ信仰を生じ、人民も之れに服從するに至つたのである。かくてマヌ法典は梵天を拜する民族の無上の權威となり、波羅門敎は社會的宗敎となり、印度のアールヤ人は一擧一動波羅門敎を離るゝ事は出來ぬ樣になつた。斯くも重要なるマヌの大法典の出來たのは今より千二百年の昔である。

今一つ注意すべきは、マヌ法典と今いふ法律との差異である。法典とはいふものゝマヌ法典は上に述べた樣に宗敎を基礎としたもので、今日法律のよりも餘程範圍が廣いのである。即ちマヌ法典には神智の事も、宗敎上行ふべ

き事も、政治の事も、現世の應報即ち刑罰の事も、未來の應報即ち輪廻する世界の事も皆規定してあるので、いはゞ、波羅門敎の百科全書とも法規大全とも稱すべき性質のものである。

さてマヌ法典に基く社會組織の根柢は何であるか。他なし殷然として犯し難い階級制度である。換言すれば、印度に特有なる四〇姓〇制〇度である。四姓とは

（一）波羅門
（二）刹帝利（クシャトリヤ）
（三）毘舍（ヴァイシャ）
（四）首陀（スードラ）

の四種である。此の四姓制度の起原は古へ印度アールヤ人種が印度河の方からヒマーラヤ山の南に侵入して來た時に、其の皮膚の潔白なのを誇つて、征服した土人と自れの種族とを區別した時に發してをる。かくて、年次を累ぬるに及んで、四姓の區別も世界の創成主たる梵天に關係して說かるゝ樣にな

つた。即ち左の傳說に基くのである。

(一) 波羅門

梵天の口より生まれ、最貴にして宗敎を司る。即ち僧侶司祭なり。

(二) 刹帝利

梵天の腕より生まれ、政治軍事を司る。即ち王者、武人なり。

(三) 毘舍

梵天の膝より生まれ、貿易賣買を業とす。即ち商賈なり。

(四) 首陀

梵天の脚より生まれ、農耕稼穡を業とす。即ち農夫なり。

而して此の階級は梵天が人間の幸福を考へて作つたのであると解釋せられ、各姓代々其の職業を傳へ、異姓の婚嫁會食を許さない。就中第四姓たる首陀は神事に與る事を得ざる規定で、施物を受くる事や、吠陀を敎ふる事は波羅門の特權で、刹帝利は波羅門に施物をなすべき義務を有し、毘舍、首陀は上の二姓を養ふべき義務がある。而して各姓の權利義務は夫れ夫れ確定して居て、少

しも動かす事は出來ないのである。斯くの如くにして、波羅門敎の社會制度が確定すると共に社會の發達は非常に阻碍せらるゝ樣になつた。

次に日常の儀式行事も甚だ多いが、煩はしいから省く事とする。唯波羅門は一生を三つの時期に分つて、夫れ夫れ、修業し、勉强し、宗敎を行ふのである。其の區分は即ち、

(一) 梵志期

兒童八歲に至れば、師について入門式を行ひ、波羅門の記號たる聖綱を著ける。それから學問修行をするので、此の時代の少年を梵志と呼ぶのである。其の學習する課目は五明である。五明とは、

(1) 聲明(シヨーミヨー) 文字字句の學
(2) 工巧明(クギヨーミヨー) 各種の技術陰陽曆數の學
(3) 醫方明(イホーミヨー) 梵呪藥石醫術の學
(4) 因明(インミヨー) 正邪を考定し眞僞を分つ論理の學
(5) 內明(ナイミヨー) 吠陀等宗敎の學

修業年限は一定してゐないが、七八年より數十年に及ぶのである。かくて修業が終れば、家に還り、結婚して、

(二) 家長期

に入る。家長として、宗教上の儀式を行ひ、五種の大祭祀を修め、子女を育て、神、祖先、聖者に對する三つの義務を終れば、家を棄て、森林に隱棲し、此に

(三) 遯世期

に入る。此の時期には少慾靜坐、專ら思ひを宇宙の眞理に潛め、梵の道を考察するのである。

第四節 波羅門教の教義

(1) 世界の成立と破壞

波羅門教の天地創造說に依れば、世界は梵天の欲望より起つたのである。今其の傳說の大要を記さんに、世界の未だ出來ぬ時、即ち太初には唯自存が渾沌たる暗黑の中にあつた。然るに夫れが自れの本質から萬物を造つてみよ

うといふ慾を起して、先づ其の思想て水を作り、水の中に卵を入れた。そして自ら梵天になつて、其の卵の中に生まれた。梵天は自れの考へて、卵を二つに割つたが、上には天、下には地、中には空が出來た。夫れから梵天は自れの本質を割いて、半ばは男、半ばは女を造つた。かくて其の女から一切の生物を生じ、地、水、火、風、空の五つの物素と、喜、憂、闇の三つの性用を以つて世界を整理した。從つて人間の祖先マヌも出來、凡ての宇宙が成立したのてある。さて此の世界は梵天の欲望から起つたから、苦痛多い、厭ふべき世界てある。世界は段々次の四の時期を經て墜落し、混濁して行くのである。

(一) クリタ時代

惡はなく、善ばかりて、人々は皆敬神の志深く、四姓の制度其の他宗教上の儀式は完全に行はれ、食は滿ち、爭ひはなく、理想の時代てある。

(二) トレタ時代

(三) ドヴーパラ時代

前者の時代には善は四分の三となり、後者の時代には善は二分の一に減じ、種

々の惡行增加して、漸く墜落澆季の世になつて來る。

(四) カリ時代

諸惡充滿して、善は僅に四分の一殘つて居る。

以上の四時期を合せて一大時期とし、一千の大時期を經れば、梵天は眠りに就いて、全宇宙を自己に復歸せしむる。かくて又覺めて世界を開發する。斯く世界は梵天より出でゝ、又梵天に復歸する。此の一千の大時期を一劫波と名づくる。而して梵天は開發復歸を無窮に繰返すのである。

要するに波羅門教の世界創造說は古へを善とし、今を惡とする一種の尙古思想に成つたもので、世は益澆季に赴き、惡は益增加しゆく厭ふべき多苦の修羅場である。斯く世界の多苦墜落を說くところに於いて波羅門教の厭世觀が成立する。

(ロ) 輪廻と解

一切の行爲は過去、現在、未來の三世に亙りて、必ず相當の報酬を受くる。之れを業果と稱する。而して世界の萬物は一として、喜德、憂德、闇德の三つの性

用を具へてをらぬものはない。而して善行には喜德相伴ひ、惡行には憂德相纏ひ、愚行には闇德が從ふから、或は波羅門に生まれ、或は刹帝利に生まれ、或は其の他の劣等物に生を受くる。斯く生死して極まらぬ。即ち轉生輪廻するのである。マヌ法典には一々の所業に對して、輪廻する境界の有樣を極めて具體的に記載してある。

世は苦み多く諸惡充滿し、人は業に依つて轉々輪廻して止む時を知らぬ。かゝる世界觀に於いては變化差別の惡世を解脫して、永遠常樂の世界を希求する感情の生じ來るは拒むべからざる徑行(みちゆき)である。梵天は一時眠りに入りて差別界を收むれども、醒むれば、再び多苦の世界を現ずる。果して然らば、如何にして、眞に差別界を擺脫して、眞の平等無差別界に入る事が出來ようか。曰く、梵天を信じて之れに合せん事を勉めねばならぬ。更に明かにいへば、宗教を信じ、吠陀を尊び、善を行ひ、惡を離れ、四姓の義務を嚴守し、供犧祭祀を盛んにして、其の効力に依つて漸次梵天に近づき、遂に「梵と我れとは一なり」といふ智見を開かねばならぬ。此の智見にして、一たび開くれば、梵天の劫波も、輪廻

の苦痛も皆超脱して、全く梵天と合一し、再び差別界の法則に支配せられぬ様になる。これが波羅門教の解脱である。宗教の理想、至高善である。

(附) 印度教

印度教の名て波羅門教を呼ぶ事も稀にはあるが、現今一般に印度教と呼んてをるのは、佛教興隆後一時衰へた波羅門教が佛教の影響を受け、民間信仰を攝して、再び勢力を恢復した新波羅門教の事てある。而して此の新波羅門教即ち印度教の打撃に遭うて、佛教は印度に滅び、波羅門教も舊態を更めた。故に其の新教義の一斑を附記して置くのてある。

佛教勃興後波羅門教は一時勢力を失ひ、沈滯してをつたが、漸く英雄崇拜や、民間の俗信と接近し、融和して新なる傾向を生じて來た。而して西紀七百八十八年にシャンカラ、アチャールヤ出づるに及んて、一新面目を發揮し、此に印度教を確立した。

其の社會的方面の制度は波羅門教と異る所はない。四姓を根本とし、寡婦の夫に殉死すべきを規定し、冠婚葬祭の諸事を規定した。就中時世の變遷と

見るべきは、昔は波羅門族は皆宗教に從事してゐたが、段々同族の人口增すに從つて、餘儀なく他業にも從事せねばならぬ様になつたので、印度教の法典では、あらゆる職業を清き業、穢れたる業の二種に分類して、波羅門族の穢れたる業に就く事を禁じた事てある。是れ等の事を記載した新法典は現存するもの十六種あるが、就中最も貴重なる法典はヤジニャヴルキヤてある。

信仰の方面に於いて著しい變化は梵天、ヴヰシヌ、シヴ三神の崇拜てある。こは固と梵天の世界を創造し、維持し、破壞する三方面の性質を神格化したので、梵天は創造の方面、ヴヰシヌは維持の方面、シヴは破壞の方面を表現して居たが、後には個々別々の人格を具へた三柱の神と變じ、他の神の關係なく各の神を拜する様になり、人格を具へた神となつた。而してヴヰシヌは維持の神て、溫容慈愛の神てあるので、段々人間に親まれて、遂に昔物語の多くの英雄は此の神の一時姿をかへた化身てあるといふ考へが起るに至つた。かくてヴヰシヌは種々の形に化現するものとせられ、魚や獅子となつて現るゝ事とさへ信ぜられた。

斯くの如くにして、三神は益相隔り、獨立に拜せらるゝ樣になつてから、種々の儀禮を生じ、偶像や殿堂が出來、巡禮の風習も起つた。其の建築の壯大なる、其の儀禮の華麗なる、其の緣起の怪誕なる、段々信仰は固成して、宗教は安心立命の具たる活氣を失ひ、雜多の迷信百出して、又救ふ能はざるに至つた。

印度敎の分派は非常に多くして、列擧するに遑ない程であるが、何れも迷信に陷つて居る。或は額上に、烙印し、或は腕上に烙印し、種々の醜態を演出して止む所を知らざる程である。例へばシヴ崇拜の一派は前額に白色を以つて三橫線を描きて、信徒の標章とし、ヴヰシヌ崇拜の一派は縱に紅黃白の三線を描いて他と區別する。而して前者は三十二珠の珠數を携へ、後者は百〇八珠の珠數を持つて居る。而して其の最も甚しき病的現象は、生殖器の崇拜である。

印度敎の頑頂なる儀式と社會制度とは遂に人間の活力を消耗せしめ、智識は停滯し、文化は固結し、遂に印度をして今日の悲境に沈ましむるに至つたのである。迷信の弊も此に至つて極まれりといふべきである。

第六章　佛敎

第一節　釋迦及び其の時代

今日吾れ吾れが佛敎と呼んで居る宗敎は釋迦の立てたる敎である。故に佛敎の源泉たる釋迦其の人を識らずには佛敎なる大河を知ることは出來ぬ。

釋迦の傳記は甚だ明かでない。殊に後世の佛敎徒が其の敎祖を崇拜した餘り、人間にはあるまじき奇瑞靈異を以つて、釋迦一代の傳記を彩色したので釋迦は人間であるか神であるか分らぬ位朦朧たる人格となつてしまつた。或は其の降誕するや、母后の右脇から生まれたといひ、歩すること七歩にして「天上天下唯我獨尊」と叫んだと傳へ、殆んど其の眞相を捉ふる事が出來ぬ。

併しながら、吾れ吾れは左樣な事を事實として信ずる譯には行かぬ。吾れ吾れは釋迦、孔子、耶蘇を世界の三聖人と呼び、或は之れに希臘のソクラテスを加へて世界の四聖と稱して居るが、吾れ吾れが釋迦を左樣な傑れた人々の中に數へて尊敬するのは、傳說にいふ樣に釋迦の身體が黃金であつて、其の眉間

に白毫といつて白い毛髪があつたとはない。又或は大神通力を現じて弟子達を驚かしたり、過去や未來の事を豫言したりしたからではない。全く彼れの人格が偉大であつたからである。實に人格は世の光である。偉大なる人格を有する釋迦は吾れ吾れの儀表である。吾れ吾れの知らんとする釋迦は神話の白粉や、傳説の紅を以つて彩色された釋迦ではない。此れ等の白粉や、紅を洗ひ落した純粹の人格である。赤裸々にして、光を放つ事の出來ない人は偉人と稱するに足らぬ。故に今は從來の傳説を離れて、出來るだけ釋迦の眞相を述べようと思ふ。

(イ) 釋迦出現の時代

人は植物の様なものである。植物の種子は異つた土壤に播けば必ず幾分か本來の性質を變ずる。高潔雪の様な高山植物でも、之れを平野に下せば、其の雄と潔とを失つて、小さい花を着くるに過ぎぬ。一瓣の花一枚の葉にも必ず其の地方的の影響があらはれずには止まぬものである。夫れと同じく、人間も四圍の風土や、父祖民族の習慣性質に左右さるゝ事が夥しい。隨つて、興

つては仆れ、仆れて興つた古來幾多の人生觀や、世界觀や、其の大部分は必ず其の時代、其の國土の色彩を帶びてをる。謂はゆる時代思潮の一波一瀾を全く脱する譯には行かぬ。偉人は時代を作るといふが、時代も亦偉人を産むのである。故に時代を離れて、偉人を見ることは不可能である。夫れで、今釋迦を述ぶる前に、其の時代の狀態を少しく紹介しようと思ふ。

果して然らば、釋迦が如何なる態度を執つて、如何樣に其の教へを宣傳せられたか。之れを知るには、どうしても其の時代を知らねば分らぬのである。時代や社會の狀態に相應して説かねば、たとへ貴い道でも効力はない。其の時代が渇してをれば、水を與へねばならぬし、餓えて居れば、パンを與へねばならぬ。良醫は如何なる病人にも同一の藥劑は與へない。病に依つて適當な處方を用ゆる。釋迦は時代の醫師であつた。隨つて時代や、人間の要求に應じて、良藥を投じたのである。然らば釋迦出現の時代は如何なる時代であつたらうか。

印度民族最初の狀態から、律法的供犧時代の概觀は既に前章波羅門教の條

下に述べた通りてある。然るに、波羅門族が段々勢力を得る様になつてからは、僧侶の權力益強く、祈禱や供犧の方法は非常に複雜に赴き、犧牲を梵天に捧ぐるにしても、面倒な祕傳が出來る様になり、又數百頭數千頭の牛羊を捧げねばならぬ有様となり、貧民や、波羅門族外の人民は梵天の恩惠に與る事が段々出來なくなつて來た。而して波羅門族は益跋扈して來て、唯自分達の利益を保護するために、種々の亂暴極まる法律を制定して、他の門族を拘束しようとする。其の亂暴極まる法律の例を示すならば、摩奴（マヌ）の法典の中には、

たとへ、草の葉を以つてするも、波羅門を打ちたる者は、平伏して許しを請はざるべからず。

とか、

波羅門を謗りたるものは、赤く熱せる鐵條を其の口に突き込むべし。

等いふ言語道斷な條項が出來た。

此に於いて、今迄平和を樂んで居た印度民族は梵天を拜む事さへ自由にならぬ様になり、梵天は全く波羅門族の保護神となつてしまつた。人民は自由

を奪はれ、思想は固定して化石した。

凡そ物壓せらるれば暫くは撓むが、彈力あるものははね返さねば止まぬ。一方に非常な壓制が行はるれば、一方には益反抗の氣燄を高め來るは理の當然である。印度當時の社會も亦此くの如く、一方に波羅門族が宗教の勢力を擁して暴威を振へば、他方には之に對抗する自由思想派が起つて來た。かくて壓制の雲を破つて燦然たる光を放つ星がぽつぽつ見えそめて來た。これが謂はゆる九十六派の哲學派、佛教でいふ外道（げだう）てある。釋迦も此れ等の哲學派と前後して、印度の天に輝きいでた大きな明星てあつた。

要するに、是れまて、波羅門族の手にあつた宗教を引下して、平民的にし、一般的としたのが釋迦の教へてある。これまては、宗教といへば、僧侶即ち波羅門族の專有てあつた。釋迦は此の媒介物——無用な——を排斥した。換言すれば、黄金と家畜て贖うて居た宗教的慈愛を、釋迦は信と行とを以つて、容易く何人にも得る事が出來る様にした。佛教は平民の宗教となり、農夫の宗教となつた。一言にいへば、神と人との間を塞いてゐた波羅門族を排して、天と人

とを連結した。慈悲平等の教へが即ちこれてある。

(ロ) 印度思想に於ける釋迦の地位

印度に於いても、希臘と同じく、哲學思想の起りは、神話や傳説の解釋に基いてをる。既に前章に述べた通り、始め印度「アールヤ」民族は、月だの、日だの、風だの、雲だのいふ謂はゆる天然現象の一つ一つを、不思議な神の力が其の中に居つて、暴風や夕立の様な怖ろしい現象を起すのだらう。雲の神が居るに違ひない、風の神が居るに相違ないと考へて、一心に此れ等の神々の御氣に入る様に供物を捧げて、何卒惡をはらひて、幸福を降し賜はれかしと禱つた。澤山の神々が波羅門教時代には、一つの大神梵天に統一されて、此の梵天が世界の主となつた。

然るに斯ういふ解釋に滿足しない、智者や學者は、更に自分で考へて、天地宇宙の眞の相を究めようとしてかゝつた。此れが印度に於ける哲學思想のはじまりてある。これ等の學者達は座禪をして、靜かな場處に退いて、宇宙の問題を考へたが、其の結果が「ウパニシャット」といふ本になつた。

此の「ウパニシャット」といふ本は澤山あるが、夫れは後世に段々と出來たのもあつて、此の時代に出來たのは十數種であつたといふが、其の哲學思想の大體は、梵といふ宇宙の大精神があつて、夫れから此の世界が出來た。さて又吾れ吾れの個體精神即ち靈魂の根柢は此の梵なる宇宙精神であるが、吾れ吾れが其れを知らずに居る爲に此の様な汚れた悲しみ多い世界に生まれて來たのてある。故に智見を開いて、

夫れは彼れなり

即ち個體精神は其の儘根本は宇宙精神であると悟れば、吾れ吾れは解脫を得るのてあるといふ。

「ウパニシャット」が一たび、在來の思想の外にいて、宇宙人生に關する新哲學、新意見を打建てゝからは、各種の自由派が雲の如くに起つた。其の學派の數は或は九十五學派てあるといひ、或は九十六學派あつたといひ、確には分らぬが、其の中て、最も有名なる學派が六つあつて、世に之れを「六師外道」又は「六派哲學」と呼んてをる。其の名稱は次の通りてある。

其の一々の學派の意見主張は頗はしいから此には述べぬ事としよう。

(一) 尼耶也(ニヤヤ)學派　卽ち　因明(インミヤー)學派
(二) 吠世史迦(ヴアーイシエーシカ)學派　卽ち　勝論(シヨーロン)學派
(三) 僧佉(サーンクヤ)學派　卽ち　數論(スーロン)學派
(四) 瑜伽(ヨーガ)學派　卽ち　祕密學派
(五) 弭曼差(ミーマンシヤー)學派　卽ち　聲論(シヨー)學派
(六) 吠檀多(ヴエダンタ)學派　卽ち　梵天學派

此れ等の各派の中、尼耶也學派は今の論理學を主とする學派で、弭曼差學派と吠檀多學派の二學派は波羅門敎を解釋する爲に起つた哲學派で、正統波羅門哲學派ともいふべきもので、吠世史迦と僧佉の二學派は波羅門敎に反對の意見を持つて起つた哲學派で、此れ等六哲學派の中で、最も有名なのが吠檀多學派と僧佉學派の二學派である。

以上の諸學派は眞面目に宇宙人生の根柢を知らうといふ切實なる研究心から起つた學派であるが、別に順世(ロカーヤ)學派又は順世外道といふ自暴自棄の一派

が起つた。これはどうせ宇宙人生の根柢等人間の智識で分るものではない。梵天があるか、ないか、少しも分らぬ。そんな夢の樣な神に犧牲を捧げたり、祈禱をしたりして、天上に生まれようと願ふのは愚の至りである。人生は短い。死後の事は分らぬ。宜しく酒を飮み、歌をうたつて、愉快に暮らした方がましてはないか、友人の金ても何ても借つて飮むが好いといつた樣な自棄派、快樂主義で、今日の言葉でいへば、本能滿足主義であつた。是れ實に嚴格な律法で一切をしめくゝらうといふ波羅門敎のやり方に對する反動である。

かく印度の思想界が亂脈を極めて居る時代に、理論に馳せず、卑近に失せず、能く中庸を得た敎へを布いたのが釋迦である。譬喩を以つていへば、印度を一の湖水と見る。此の湖水の內部に渦瀾(カヅン)が起つて、水が一面にあれたつて來た。故にどうしても適當な溝を穿つて、此の水を平地に導かなければ、一大洪水になるにきまつてをる。然るに從來の溝であつた波羅門敎は古くなつて水が通はぬ樣になつた。そこて、六學派等の多くの溝を新に穿つたがどうも溝の位置が高くて水が流れぬのみか、順世學派等といふ嵐が起つて、湖水は益

大浪を立てゝ來た。此に於いて、釋迦一たび起つて、高からず低からざる溝を作つて湖水の水を徐々に平原に導いた。故に水は滔々として低きに就いて、靜かな廣い新湖を作つて、平和の色に輝いた。此れ即ち佛敎である。

(ハ) 釋迦の略傳

釋迦出世の年代は明かでない。諸君の知らるゝ通り、印度は非常な非歷史國であるから、年代上の事は殆んど全く分らぬといふ方が適當である。

釋迦の年代を確定するには、從來其の入滅の年代を以つて基本としてゐた。而して釋迦は天壽八十歲であるから、降誕の年代は入滅の年代から、逆算することが出來る。然らば其の入滅年代は確に分つてをるかといふに、是れも甚だ分つてゐない。古來入滅年時に關する異說が五十二種もある。今其の中の十種を揭げて、諸君の參考に供しようか。

(一) 緬甸(ビルマ)の傳說に據れば西曆紀元前四百四十二年
(二) 羅什の說に據れば同六百三十七年
(三) 西藏の傳說に據れば同五百四十六年 (西藏の一說)

(四) 遮羅錫蘭の傳說に據れば同六百年
(五) 費長房の說に據れば同六百〇九年
(六) 善見律毘婆沙(ビバシャ)に據れば同四百七十九年
(七) 錫蘭の傳說に據れば同五百四十四年
(八) 佛陀伽耶(ブッダガヤ)碑文(第一)に據れば同四百八十一年
(九) 佛陀伽耶碑文(第二)に據れば同五百四十三年
(十) 衆聖點記に據れば同四百八十五年

之れより八十を逆算すれば、大略、

降誕の年時は西曆紀元前　第六世紀
入滅の年時は西曆紀元前　第五世紀

となる。故に眞の年代が分らぬ現時の狀態に於いては、諸說を折衷して、釋迦は西曆紀元前五世紀六世紀の間に生存してゐた一偉人と見れば大なる誤りはあるまい。即ち釋迦は今より二千四五百年前の人である。

年代と共に忽にすべからざるは、地理である。年代と方處は共に歷史の二

大眼目である。然らば釋迦は印度のいかなる部分に生まれたであらうか。

我が國にはいかなる理由かは知らぬが、釋迦は錫蘭島に生まれたといふ一種の俗説がある。此の説は餘程廣くひろまつて居ると見えて、大概の人は左樣に信じてゐるのである。是れは非常な謬である。釋迦は左樣に南方の印度に生まれたのではなくして、もつと北の方の印度即ちヒマラヤ山に近く、ガンヂス河の畔、今のベナレス附近に生まれたのである。故に釋迦が錫蘭島に生まれたといふのは全く無根の俗説に過ぎぬ。

釋迦とは印度アールヤ人種の一支族の名である。釋迦族は恒河の支流ロヒニーの畔に國を建てた農民の部落で、甘庶王の裔である。淨飯王に至つて、同じ釋迦族の阿魔釋迦王の女摩耶を娶つて、一王子を擧げた。是れ即ち釋迦佛である。

淨飯王の都は迦毘羅城といひ、阿嵬釋迦王の都は拘利城と稱するが、此の二城の間に嵐毗尼の園がある。傳に據れば、陽春花匂ふ四月八日の曉、摩耶故城に向ふ時、此の園に於いて、王子を綠葉の泉の畔に産んだといふことである。

當時王城には未だ王子がなかつたので、滿廷の歡び、民衆の歡呼一通りではなかつた。時に一老仙がやつて來て、小王子を相し、潛然と涙を垂れて「此の王子家にあらば四兵を率ゐて天下に王たるべく、若し家を出でゝ、道に志さば、人天の師となり給ふべし。我れ老いて其の期を見る能はざるを憾みとす」と啓した。淨飯王は嘉名を選んで、悉達多と名づけた。蓋し悉達多とは「物悉く成る」といふ意である。

然るに夫人は産後七日にして世を去り、王子は叔母の波羅闍波提夫人に育てらるゝ事となつた。王は愛子の爲に當時の名儒を求めて師とし、勇士を求めて、傅とされた。王子は幼くして聰明、聖典に通じ、武道に秀て、一國敬慕の中心となつた。

殊に此の小王子は將來迦毘羅城の王位を繼ぐべき太子であるので、其の教育は十分の注意を以つて施された。群臣或は太子の文をのみ講じて、武を忽にせらるゝ傾があると啓したものがあつたので、太子は同族の諸王と後園に駿馬を驅り、勁弓を引いて、鐵鼓を射貫し、以て其の非難を打消された事がある。

然るに斯くも榮華の中にありながら、太子は窃に思ひを人生の眞相に廻らし、囉樂の久しからざるを歎じて、厭憂愁に沈んだ。ラセラスは幸福の谷に歿いて、浮世を嘉うたが、太子は逝きてかへらぬロヒニーの河の音に、深く人生の無常を觀じたのである。

深い思ひが段々と擧動に現はるゝので、滿廷の臣は大いに驚いて、鳩首して協議の末、益殿閣を飾り、池苑を穿つて、其の心を奪はうとした。而して淨飯王は拘利城の善覺王の女耶輸陀羅姫を迎へて、妃とされた。斯くて太子は幾もなく王子羅睺羅を擧げたが、憂愁は益深くなつて來たのである。

此に於いて、太子は出家して道を得たいと數次父王に願うたが、父王は老年ではあるし、殊に小國とはいへ、一國の太子であるので、中々許されぬのみか、非常に心を痛めて、群臣と共に太子の志を翻すあらゆる策を施された。傳に據れば、太子は四方の城門に出遊して、老者、病者、死者、沙門を觀たので、益悲憂を增し、出離の心を固めたといはれてをる。

斯くて人生に對する疑惑は愈激しくなつたので、一夜決するところあり、御

者車匿に命じて、白馬犍陟に跨り、飄然として城門を出た。時に歳正に二十有九、流星の如くに、曠野を指したのである。

東行十七里餘、阿跋彌河の深林に尋ね入り、服飾玉冠を棄てゝ、一領の黄衣を纏ひ、鬚髪を削り、獨り奥に進んだ。車匿は太子の昨日に變る姿を見て、泣いて今一度故宮に還り給へと勸めたが彼れは之れを斥け、慰めて王城に其の志の奪ひ難き旨を告げさせた。翌曉王城では太子の見えぬので、一國の騒ぎとなつたが、車匿が悄然として歸つて來たので、事情が分り、王師大臣が直に太子の跡を追うて、遂に太子の林中に端坐してをるのを見出したので、父王の歎きを訴へて、切に歸城を勸めたが、太子は嚴然として諫を斥け、「わが今暫く父母を離るゝは終に永く合はんが爲なり。假令雪山は動かすべく、日月は斬つて落すべきも、我が志は變ふべからず」と大決心を示したので、終に爭ふ言葉なく、從者の中から、憍陳如等五人を遣して、太子に從はせ、斯の旨を王城に復命した。

前に述べた樣に當時波羅門教は安心立命を與ふる力なく、熱心求道の士は皆深林に退いて、解脫の道を希求して居た。太子は此れ等の仙人を歴訪して、

解脫の道を尋ねたが、或は酷烈なる苦行をせねばならぬといひ、或は斷食禁欲して死後上天の法を修むべしと說き、一も太子を滿足さする事は出來なかつた。そこて太子も失望して、獨り茫々たる曠野に人生の歸趣を求めて、泣いたが、多くの求道者が、或は灰を身に塗り、或は棘の上に臥し、種々の苦行を試みてをるを見たので、苦行も或は解脫の道ではあるまいかといふ考へが起り、自らも非常に酷烈な苦行を實行した。

此の苦行は六年の久しきに亙つたが、少しも眞理の光が見えぬのである。而して氣は衰へ、體は疲れ、皮骨相連るのあはれな姿となつた。太子深く省みて、苦行の解脫の門にあらざるを看破し、尼連禪河に浴して身を淨めたが、氣力が衰へて居るので、岸に上る事が出來なかつたが、幸にも汀に樹が生えて居たので、其の枝に縋つて河を出た。時に河の畔に難陀婆羅といふ一牧女が乳を捧つて居たが、太子を見て、乳糜を捧げたので、太子は受けて之れを飲んだ。之れを見たる五人の從者は太子苦行に堪へず、墜落したのであると考へたので、皆棄てゝ去つてしまつた。

此に於いて、太子は孤影寥然として、伽耶に向ひ、畢波羅樹の下に昔仙人の端坐した金剛座があるのを見、草を舖いて、其の上に結跏趺坐し、假令日月は墜ち天地は崩るゝとも、眞理の光を見ずんば、死すとも立たじと誓つた。

傳說に據れば、多くの惡魔は矛を提げ、劍を揮つて、樹下に迫り、或は脅し、或は誘ひ、或は美妃を送つて、あらゆる誘惑の手段を盡したが、太子は一髮も動かすに至らなかつた。斯くて心を宇宙の奥底に潛め、思ひを人生の歸趨に走らし正念端坐して、世相の根柢を觀破し、無上の眞理に徹見した。時に三十五歲の十二月第八日、曉の明星燦として東天に輝く時であつた。此に曠野に迷うた一沙門は人天の師三界の覺者佛陀となつたのである。

佛陀は其の淸新の敎を四方に宣べた。先づ前に彼れを棄て去つた五人を度し、鹿園に行いて耶舍以下を救ひ、成道後三箇月にして、五十六人の弟子を得た。此に於いて、彼れ等を分遣して敎を諸方に說かしめた。斯くて自らは王舍城に往いて、拜火外道の迦葉兄弟三人を救うて弟子となし、頻婆沙羅王を說き、竹林精舍を受け、次いで、舍利弗、目犍連、摩訶迦葉等の入門となり、敎團の勢力

は非常に盛んになつた。かくて成道第五年には故郷を訪うて父王を慰問し、祇洹精舎の建立となり、摩竭陀王阿闍世の歸依となり、上は王侯より下は農夫賤民に至るまで、轟の聲に應ずるが如く、皆其の敎に歸した。而して佛陀は席暖まるに隙なく、南に北に、道を中印度の地に說かれた。彼れの說法は極めて痛切で、譬喩を交ぜ、昔話を引き、地方地方の方言を以つて四諦の意味を懇切に述べたので、目に一丁字なき輩までも、其の說法を聽くのを樂みとした。而して間には迫害暗殺を圖つた者もあつたが、四十五年間無事に傳道に從事し、今や波羅門となく、首陀となく、皆彼れの門に馳せ集まつた。佛陀は彼れ等を過するに平等の見を以つてし、諸川海に入れば形と名とを失ふ。沙門も亦斯の如し。一たび道に入れば、波羅門もなく、首陀もなく、皆是一味の佛子のみと說いたので、當時階級制度に苦んで居た印度の民は草の風に偃するが如く佛陀の慈愛に歸したのである。

佛陀は成道第四十五年の秋、吠舍離城に最後の別れを叙し、乾荼村に於いて入滅の預言をなし、波婆城の金工純陀が檬果園に休み、拘尸那城邊跋提河の

畔に行いた時に病が甚しかつたので、娑羅雙樹の間に臥し、是れまで常に左右に從うて居た阿難に、「我れ今夜涅槃に入らんとす」と告げた。

時は維二月十四日の夜半、萬籟死して音なく、枕を圍む數百の弟子は暗涙を呑んで居る。佛は重い頭を擧げて其の愛する弟子達に別れを叙し、最後の敎訓を遺さるゝのである。

我れ年既に八十、譬へば故車の如し。今は將に逝かんとす。夫れ生あれば死あり。會ひし者の離れざるべからざるは、汝等の聽ける處、何の悲む事かあらん。汝等自らを燈明とし、自らを光とし、努めて道を求めよ。人を賴み、他に倚る事勿れ。我が敎ふるところの敎戒を護らば、我が肉身滅すと雖も、我れは常に汝等と偕にあり。我將に逝かんとす。汝等疑あらば速に質せ。斯く問ひ給ふこと三度、皆疑なしと啓したので、十五日の曉滅焉として、涅槃の國に歸られた。弟子相集りて茶毘し、八處に記念塔を起した。斯くて千古の大聖は肉身の終末を告げたのである。

第二節　佛教の經典

(1) 經典の種類

佛教には基督教の様に根本の經典となるものが一定して居ない。基督教の經典はいふまでもなく、新約全書であつて、其の根本は如何なる經典かといへば、四福音書である。然るに從來佛教に於いては、全佛教徒即ち何宗何派の僧侶も信徒も皆悉く一致して是れが佛教の根本經典と認めたものはなかつたので、宗派に依つて其の根本經典ともいふべきものは皆異つて居るのである。故に佛教の經典については、煩を厭はず、少しく説明するところがなくては佛教を能く解するには不便である。

今各宗の夫れ夫れ尊んで、あらゆる經典中で最も尊いものとしてをる經典を擧げてみよう。

(一) 天台宗　法華經
(二) 華嚴宗　華嚴經

(三) 涅槃宗　涅槃經
(四) 眞言宗（密教ともいふ）　大日經
(五) 日蓮宗　法華經
(六) 淨土教　無量壽經（淨土教の名目の下には淨土宗、眞宗等を含む）

主なるものは此の通りである。其の他論部即ち釋迦以後の高僧碩學の哲學的著作に依つて開かれた宗派も少くない。例へば、俱舍宗、成實宗、三論宗等の如き是れてある。併しながら、是れ等は釋迦の説法を筆錄したものでないことは固よりてある。

然るに上に掲げた諸經の様に佛教で經と名のついたものは皆釋迦の説法を後に筆錄したものだと信ぜられてをる。而して各宗其の中何れが最も尊きかにつき、各意見を異にした結果、前の様な宗派を形成するに至つた。斯くの如く、多くの經中について、最も優れてをる經典を選ぶについて、先づ夫れ等多くの經典の價値を批評せねばならぬ。是れを教相判釋と稱するのてある。

今一般に行はれてをる天台宗の見方によつて、釋迦一代の説教の順序を分

頗すれば次の如くてある。

釋迦一代の說敎

第一時　華嚴
第二時　阿含
第三時　方等
第四時　般若
第五時　法華、涅槃

即ち釋迦は正覺の後三七二十一日間を第一時として其の間に、華嚴經等を、次の十二年を第二時として其の間に阿含經等を、次の八年間を第三時として、方等經等を、又次の二十二年間を第四時として、其の間に般若經等を、終りの八年間を第五時として、其の間に法華經、涅槃經等を說かれたといふ事てある。以上の諸經典を名づけて經部又は經藏といふ。

次に戒律といふものがある。是れは釋迦が時機に應じて、弟子達の日常行爲の規矩法則とし、これに依つて、惡を止め、道に進ましむる據りどころとしたものでである。之れを後に編纂したのが律部又は律藏と呼ばれてをる。

次に論部又は論藏と稱する著作がある。是れは後世の高僧碩學が敎義敎理の新解釋を試みる爲に作つたのや、經其のものに注釋を加へたもの等の總稱てある。

以上經藏、律藏、論藏を總稱して、之れを三藏といひ、此の三藏の全部を稱して大藏經又は一切經といふ。即ち一切經は佛敎の百科全書てある。

さて、然らば此れ等大藏經の總數は如何程あるかといふに、

(一) 宋時代には　五千七百四十卷
(二) 元時代には　五千三百九十七卷
(三) 高麗時代には　六千四百六十七卷
(四) 明時代には　六千七百七十一卷

あつた。而して、

(五) 我が國では　八千五百三十四卷

ある譯てある。其の多量なる實に驚くべきてはないか。否、これは唯漢文に

譯せられた經典である。此の外になほ梵語（サンスクリット）の經典、波利（パーリ）語の三藏、西藏語、蒙古語等の經典がある。故に其の全數の如きは殆んど、いか程に上るか計へ難い位である。

（ロ）根本經典はなきか

前に既に述べた如く、佛敎には根本經として共通に認められてゐるのはなかつた。然るに、近時言語學の方面から研究が盛んになり、歷史的穿鑿が綿密になり來るに從つて、學者間には根本經典と認められるゝものが出來てきた。否、新に出來たのではない。分つて來たのである。此の四種の阿含（アーガマ）經即ち謂はゆる「四阿含」である。

（一）長（ディーガ）阿含經二十二卷
（二）中（マジュ）阿含經六十卷
（三）雜（サンユクタ）阿含經五十卷
（四）增一（アングッタラ）阿含經五十一卷

て、パーリ語と漢譯と兩方に傳はつて居る。これ等の經典は、從來は小乘の經

典として、重んぜられなかつたが、近來忠實に釋迦の原始の敎へを說いたものとして、珍重さるゝ樣になつた。其の內容は釋迦の各處に說いた說法を筆錄して集めたもので、深い敎理を含んだものではない。かく極めて切實に適切な事を機に臨み、折に觸れて敎ふるのが釋迦の傳道法であつたらしい。此れ等の經典は孔子の「論語」の樣なものと思へば間違はない。唯論語は二十篇であるが、阿含は數百卷あるだけの相違である。釋迦の說敎に比較的修飾を加へずに、書いたのが、此れ等の經典である。

（ハ）經典編輯の顚末

釋迦は耶蘇と同じく自ら書を著さなかつた。故に上に述べ來つた經典はすべて、釋迦の滅後に多くの弟子達が相會して、釋迦の生時に聽いた敎訓を合誦して、遂に貝多羅（パッタ）樹の葉や、樺の皮に書きつけて、夫れを幾枚も幾枚も絲で貫いて置いたのである。夫れが後世に紙に寫さるゝ樣になつた。

經典の編纂は通例之れを結集と稱する。今日の經典は凡そ四回の結集に依つて出來たと傳へられてをる。今其の概略を述べよう。

(一) 第一結集

佛滅後第一回の雨期に大迦葉(マハーカーシャパ)の發議で、王舍城附近にある畢波羅窟(ピッパラグッハ)で、遺法の合誦を行うた。相會するものは五百人で、摩竭陀(マガダ)國の阿闍世王(アジャータサットル)が保護を與へられた。此の時に四阿含と八十誦律といふ戒律とを編したと傳へられてをる。

(二) 第二結集

佛滅後百餘年してから、地方に居た僧侶が戒律を少しく寛く解釋して、行つたのを、耶舍(ヤシャス)尊者といふ人が、之れを憤り、七百の人々を集めて毘舍離(ヴァイシャリ)國の婆梨迦(バリカ)園で、十箇條の戒律に就いて、雙方の意見を戰はせたが、遂に纏まらずに分派の基を作つた。此の時のは結集と名づくるものゝ、其の實唯戒律の是非を論ずる會議に過ぎない。

(三) 第三結集

佛滅後二百年頃には二十派に宗派が分れてゐたが、阿輸迦(アショーカ)大王の保護に依つて、信仰の統一を圖るために、一千人を華氏城(パータリプトラ)に集めて、經典の注釋、並に編次を

整理した。

(四) 第四結集

佛滅後六百年頃に大月氏の迦膩色迦(カニシカ)王が北印度を征服した後、其の保護の下に、五百人の僧を集め、脇比丘(パールシヴァ)といふ人を議長として、經典を編纂した。今日殘つて居る大毘婆娑(ヴィバシャ)論二百卷の如きも、此の時出來たといふことてある。

第三節 佛教の教義

(イ) 印度思想の共通點

前節に述べた樣に印度には多くの哲學派や宗教が興つて、各々其の特色を有し、異彩を放つてをる。併し此れ等の諸派は、例へば一大溪谷から四方に流れ出てた河流の樣に、多くの共通點を具へてをる。夫れ等多くの共通點の中て、最も明かな點を二三擧げてみよう。

(一) 厭世觀 現世を以つて多苦の世界とし、迷妄とし、斯る世界に生存するのは、非常な苦痛てあるとし、この世界は人間が梵を知るの明なき無明(アビドヤ)又は幻(マーヤ)

から起つたものと考ふる。隨つて斯る不完全な迷妄の世界は厭ふべき世界てある。宜しく速に、斯る世界を脫れて、更に樂しい世界に生れねばならぬ。世を苦なりと觀ずる厭世觀は各哲學派の共に有する第一の點てある。

(二) 智解脫　既に世は厭ふべきものとすれば、斯る世を速に解脫するのが人生の目的てある。理想てある。さて斯る厭ふべき世界に生まれたのは、元來吾人が宇宙の眞相を知る智識を闕いて居たからてある。故に吾人は須らく、勉めて智識を磨いて、宇宙の奥底を徹見せなければならぬ。かく智識を解脫の原因として重んずるのは又各學派の第二の共通點てある。

(三) 因果應報　自ら播いたものは自ら刈らねばならぬ。一たび爲した行爲は、いつか必ず一度は、善にあれ、惡にあれ、其の相當の報酬を受けねばならぬといふのが、各學派に通ずる第三の思想てある。

(四) 輪廻說　前の因果應報の理を現世のみに限らずして、過去と未來との三世に亙つて說明したものが此の輪廻說てある。詳しくいへば、過去の行爲の結果として、現在の生を享け、現在の行爲の結果として、未來の生を引き、前生

後生輪廻することは環の端なきが如くてある。かく輪廻する過去、現在、未來此の三世を總稱して生死大海といふのてある。此れが又第四の共通點てある。

釋迦も時代思想の影響を受けぬ譯にはゆかぬ。然らば釋迦の說はいか程まて在來の思想を承け繼いて居るか。又如何なる點に新解釋を試みたのてあらうか。次に其の一斑を說くのてあるが、但し其の革新的方面として述ぶる事も仔細に觀れば、亦在來の思想の脈を引いてをるのてある。これ釋迦の態度が實際的救濟を主として、理論を斥け強ひて異を建てなかつたからてあらう。

さて此に一言注意しておかねばならぬ事がある。釋迦が果して如何なる教理を說いたかは、經典の眞僞が決定せぬ今日實にいふ事難き問題てある。故に今は假に四阿含等にあらはれてをる教理を以つて、其の概要を紹介しようと思ふ。

(ロ) 繼承的方面

此には釋迦が從來の思想を承けついだてあらうと思はるゝ方面の數理を紹介する。先づ其の成道の後、初めて說かれたのは四聖諦（シーダイ）又は略して四諦の說てある。四聖諦とは、

(一) 苦聖諦
世界は苦みに滿ちてをる。

(二) 集聖諦
然らば、斯かる苦しき世界はどうして出來たか。其の原因は我れ等が宇宙の眞相を觀る智識がないから出來たのてある。即ちわれ等が苦なる世界に生まれたのは、無智の原因に因るのてある。

(三) 滅聖諦

(四) 道聖諦
故に善を行ひ、智識を磨いて、無明を滅さねばならぬ。この無明を滅するためには左の八つの方法を行はねばならぬ。即ち、

(1) 正信　正しき見解を持たねばならぬ。

(2) 正意　正しき意志を持たねばならぬ。
(3) 正語　眞實を語り、忽（かりそめ）にも虛僞を言ふべからず。
(4) 正業　正しい行爲をせねばならぬ。
(5) 正命　正しい清い生活をせねばならぬ。
(6) 正精進　勉强努力して怠つてはならぬ。
(7) 正念　正しい考へを持てはならぬ。
(8) 正定　正しい靜坐をなせ。邪惡な事を考へてはならぬ。

これを八聖道（シーダー）と稱し、佛敎倫理の中核て、正しく釋迦の創意に係つてをるが、便宜上今此に附記して置く。

無明を滅すれば滅に達し、凡ての煩累を超脫する事が出來る。これ即ち佛敎の理想たる涅槃（ネハン）てある。

更に十二因緣說なるものがあつて、四聖諦中の前二諦を一層詳にしてをる。今其の目を擧げて置かう。

(1) 無明

(2) 行　即ち行爲
(3) 識　人間受胎の端的
(4) 名色（ミョーシキ）　胎内にある初期
(5) 六處　胎兒の體形生ずる頃（諸種の感官生ず）
(6) 觸　生後二三歳迄（外界に觸るゝのみ）
(7) 受　四五歳乃至十二三歳（樂苦を知る）
(8) 愛
(9) 取　十六七歳乃至壯年時代（食色の慾盛んなり）
(10) 有　善惡の行爲（必ず其の結果を有するからといふ）
(11) 生
(12) 老死

四諦も十二因緣も次の表を見れば、其の何をあらはしてをるかゞ明に知られるであらう。

(1) 苦諦——結果
　集諦——原因　——迷界
(2) 滅諦——結果
　道諦——原因　——悟界

要するに、無明を以つて、世界人生の根本とし、善惡の行爲に依つて、過去、現在未來の三世に輪廻することを說くところは全く在來の思想てある。

(ハ) 革新的方面

釋迦は基督と同じ樣に、在來の思想を純化し、靈化した點が甚だ多い。今革新的方面を述べよう。

(一) 實行的倫理的態度

從來の諸學派は理論冥想を重んずる餘り、煩瑣に陷り、唯學者識者の玩弄物となり、一般人間の活生活には沒交涉となつた。釋迦は之れに反對して、理論を斥けて、實行を尙び、其の態度が實際的てあつた。故に理論に於いて多くの缺點あるに拘らず、非常な革新を遂げたのてある。嘗て弟子の一人が「世界は始

めありや、始めなきや、終りありや、終りなきや」などいふ理論的方面を問うたところが、釋迦は敎へて、我れ等は今身に毒箭を被つてをると同じてある。迅く抜かねば生命が危い。然るに何ぞさる愚論に時を費す事が出來ようか。先づ第一に抜箭法を講ぜよといはれた。これがよく、其の態度を說明してをる。

(二) 中道觀

從來の學派は或は非常に肉體を苦めて、死後天上に生まれん事を願ひ、或は順世學派の樣に愉快を是れ求めてゐた。釋迦は快樂苦行共に道を行ふ法に非ずとして、非苦非樂の中道を以つて主義とした。前に述べた八聖道是れてある。

(三) 實我の否定即ち無我說

從來の思想ては、人間には靈魂が實在してをつて、夫れが種々の行爲の司て、生前の行爲の善惡に從つて、死後には此の靈魂が相當の應報を受くると考へて居た。而して靈魂の形は拇指の樣だといひ、或は麥粒に似てゐるといひ、心臟の空窩に位してをると傳へてゐた。夢は靈魂が暫く體を離れて遊行するから起るのだといひ、要するに、靈魂實在即ち實我の存在を主張した。然るに釋迦は全く之れを否定してしまつた。

既に靈魂即ち我がないとすれば、いかにして因果應報が行はるゝか、行ふ者は靈魂である。報酬を受くるものも亦靈魂である。然るに行ふ者もなく、受くるものもなければ、輪廻といふ現象は起らぬ筈てある。佛敎は因果應報を說き、輪廻を說く、然らば此の理論上の困難はいかにして脫する事を得るか。この難點を說明するものは即ち、

(四) 三事生染說

てある。靈魂即ち實我はないが、情と塵と識との三つがあつて、此の三つが相合して、一定の境界に執着を生ずるから、欲望が起つて、生れては死し、死しては生れて、限りがないのてある。更に言ひ換ふれば、情と塵と識との三つが相して業(行爲)を生じ、此の業が三世に亘りて、善惡の應報を受くるのて、決して實我即ち靈魂があつて輪廻するのではない。

以上は釋迦の說法中の新しい方面てあるが、釋迦は更に戒律の方面に重き

を置いて實行的規範とした。斯る戒律は段々增加して、五百戒(即ち五百條)に及んだが、其の最も單純な形式は五戒である。即ち、

(一) 不殺生　生命ある者を殺す勿れ。
(二) 不偷盜　他人の所有を盜む勿れ。
(三) 不邪婬　婬する勿れ。
(四) 不妄語　虛言を言ふこと勿れ。
(五) 不飮酒　酒類を用ゆること勿れ。

之れを要するに、釋迦の敎義は、次の一偈に盡きてをるのである。

諸の惡はなすこと勿れ　衆くの善は奉じ行ひ
自ら其の意を淨くせよ　是れ諸佛の敎へなり

(諸惡莫作　衆善奉行　自淨其意　是諸佛敎)

(二) 佛敎の理想

佛敎敎義の目的は解脫である。解脫とは一切の煩惱の束縛を離れ、宇宙の眞相を徹見したる精神狀態をさすので、之れを涅槃(Nirvāna)と名づくる。此

の境界は生きてをる中に到達する事が出來る。而して修行の結果此に到達した人を阿羅漢(アラカン)といふ。阿羅漢は因果の連鎖を解き、生死の外に脫出した人である。

第四節　佛敎諸宗派の解

佛敎の宗派は甚だ多いので、其の由來を明に知つてをる人は甚だ少い。故に今主なる宗派の說明をして置かう。

(1) 三論宗　佛滅後七百年頃の龍樹菩薩(印度)作中觀論、十二門論、及び其の後百年頃の提婆作の百論の三種の論を根據とするので、三論宗と稱する。經典では般若經を所依とする。

(支那) 姚秦の時羅什三藏が右の三種の論を譯し、隋の時嘉祥大師吉藏之れを唱道してから盛に行はれた。

(日本) 推古天皇の三十三年高麗の僧慧灌來朝し、次いで吳の僧智藏が來朝して、本宗を弘めた。

（2）成實宗　佛滅後九百年頃の訶梨跋摩作成實論を所依とする一宗で、成實とは眞實の理を成就する義てある。本宗は獨立せず、三論宗の附宗として傳はつた。

（3）唯識宗　又法相宗といふ。佛滅後九百年頃の無着菩薩作瑜珈師地論等及び無着の弟世親菩薩の唯識三十頌等、並に解深密經を所依とする。

（支那）唐の時玄奘之れを慈恩大師窺基に傳へた。

（日本）孝德天皇白雉四年道昭入唐し、玄奘に學んて歸朝の後、元興寺に之れを創めた。

（4）俱舍宗　世親菩薩作俱舍論を所依とする一宗て、法相宗の附宗として傳はつた。

（5）華嚴宗　華嚴經を所依とする一宗にて、支那獨特の宗旨てある。

（支那）唐の時賢首大師の創始するところてある。

（日本）聖武天皇の天平十二年新羅の人て、日本に來て居た審祥と入唐僧慈訓（日本入）賢首大師に學び、歸朝の後奈良に創めた。

（6）律宗　律藏を所依する戒律宗てある。

（支那）魏の時戒律の翻譯が出來、道宣律師に至つて盛んに爲つた。

（日本）天武天皇の時道光に命じ、入唐して律を學ばしめられた。後孝謙天皇の天平勝寶六年鑑眞和尚が來朝して、同年四月に東大寺に戒壇を設け、招提寺を建てた。

（7）天台宗　法華經を所依とする支那獨特の一宗。

（支那）陳の時智者大師智顗の創唱する所てある。

（日本）桓武天皇の延曆二十一年傳敎大師最澄入唐して、天台を學び、同二十四年歸朝、比叡山に創めた。

（8）密宗　又眞言宗といふ。大日經等を所依とする。龍樹菩薩を開祖とする。

（支那）唐の開元七年金剛智來唐、同四年善無畏來唐して本宗を傳へ、金剛智の弟子不空に依つて盛んになつた。

（日本）桓武天皇延曆二十三年弘法大師空海入唐して、不空の弟子慧果に學び、

平城天皇大同七年歸朝して、東寺及び高野山に創めた。

(9) 禪宗　釋尊之れを迦葉に傳へ、不立文字て所依の經典はない。(支那)達磨梁の普通年中に支那に來り、慧可に傳ふ。各宗中支那に最も隆盛を來した。

(日本)後鳥羽天皇の文治三年榮西入宋、虛菴禪師に受け、建久二年歸朝して之れを弘めた(臨濟宗)。後道元入宋、如淨禪師に受け、歸朝の後亦之れを弘めた。(曹洞宗)。(德川時代に隱元來朝して黃檗宗を弘めた(黃檗宗)。

(10) 融通念佛宗　華嚴經、法華經を正依とし、三部經(即ち無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經)を傍依とする。日本獨特の一宗てある。(以下皆日本に起つた宗派)融通とは互融通徹の義、我が一念を以つて十界の衆生に回向すれば、十界の功德我れに融通するといふところから、此の名がある。

鳥羽天皇永久五年良忍上人之を創めた。

(11) 淨土宗　三部經及び世親菩薩作往生淨土論を所依とする。高倉天皇承安五年三月法然上人源空之れを創めた。其の分派の主なるものは三派ある。即ち、

(イ) 鎭西派　土御門天皇元久元年弟子辨阿の鄕里筑紫善導寺に開いた一派。

(ロ) 西山派　弟子證空の西山善峯寺に開いた一派。

次の一派は弟子親鸞の一派て、全く獨立して、眞宗と稱する。

(12) 眞宗　三部經を所依とし、特に無量壽經を重んず。後堀河天皇元仁元年親鸞之れを開いた。後ち十派に分れた。

(13) 日蓮宗　法華經を所依とす。故に又法華宗とも稱する。後深草天皇建長五年四月日蓮之れを開いた。

(14) 時宗　三部經を所依とし、特に阿彌陀經を尙ぶ。後宇多天皇建治二年三月二十五日一遍上人之れを創めた。時とは臨命終時の意。生死流轉は命終る時定まる故平時常に臨終の時と心得て念佛を怠るべからずといふ意。

第七章　波斯教

第一節　ゾロアスター

印度人と波斯人とは共にアールヤ人種に屬し、太古裏海の邊から、東を指して移轉した民族である。彼れ等は共に遊牧の民で、水草を追うて進んで來たが、一部はイーラシ高原に部落を作り、一部は更に東の方インダス河畔に止つた。前者は波斯人となり、後者は印度人となつた。故に此の二族は類似せる神話を有せるのみならず、其の神を祀る儀禮の如きも亦互に類似してゐたのて、祭祀は之れを野に行ひ、犧牲を捧げ、酒を灑いだ。

斯る民間信仰を整理し、改良して、波斯宗教の基礎を置いたのはゾロアスターの人てある。

ゾロアスターは何時頃生存し、如何なる事をなしたかは、今日未だ明に之れを知る事は出來ぬ。併し彼れは架空の神話的人物ではなく、實際生存し云爲した人物てある事は疑ふ餘地がないのてある。而して其の時代については、

諸說紛々歸するところを知らざる有樣てあるが、一說には西紀前六百年頃の人といひ、又一說には一千四百年頃に出た人といひ、或は一千四百年頃てあると稱するが、波斯の傳說に據れば、西紀前六世紀に布教したといふ。

年代既に斯くの如く茫漠たる有樣てあるから、其の行跡も固より明かに知る事は難い。現時の研究に因れば、彼れは西部イーランのアトロパテネに生まれ、東部イーランのバクトリア王ヴイシタスパ王の外護を得て、其の王國に布教した。傳說に從へば、三十歲の時初めて宗教宣布に從事し、四十二歲の時バクトリア王を歸向せしめ、七十七歲にして、チユラニヤ人の殺す所となつたといふ事てある。而して其の傳記は多くの他の宗祖の如く、怪誕奇蹟を以つて埋沒せられ、其の人格の高い光は之れを仰ぐに由なきに至つたのてある。

ゾロアスターの時代には波斯の民間信仰は統一あるものてはなかつた。種々の俗信や、外部蠻族の俗信に影響せられた信仰が行はれて、正に改良を要すべき時期てあつた。之れを整理し、改良して後世波斯教と稱する宗教の基を開いた偉人はゾロアスターてある。

ゾロアスターは善惡の二元に依つて世界の創造を說き、宇宙は善惡の斷えざる爭鬪場たる事を敎へ、我れ等は常に善神を崇拜し、之れを輔けて、惡神を逐ひ滅さねばならぬ事を敎へた。

今其の說の大要をいへば、世界未だ成らざる時に、精神と物質との二元が個々別々に存在して居た。而して、此の二元の合體協同に依つて世界は出來上つた。世界が出來ると精神物質の二元はなくなつて、今度は善惡の二元が夫れ夫れ世界を分ちて支配する事となつた。即ち善神と惡神の二柱の神が世界を支配する事とて、世界は常に善惡の爭鬪に滿ちてをる。世界は此の二神の相戰ふ戰場である。善神は人間其の他の生物に恩惠を與ふる神て、惡神は之れに反して禍害を降す神てある。故に吾れ等は常に善神に與して、惡神を逐ひ、以つて善神の惠みに浴し、惡神の禍害を避けねばならぬ。惡神は恐ろしき神てあるが、されば、といつて、恐怖の餘り惡神を崇拜する必要はないのてある。唯善神を讃し、善神に從ひ、善神を輔けて、惡神を避くる事を力めねばならぬ。而して善神は之れをアフラと稱し、惡神は之れをデヴと呼ぶのてある。

是れがゾロアスターの根本思想てあり、波斯敎の敎義の核實てある。後に之れに基いて、之れを整理し、之れを修飾したのが發達した波斯敎の完成した形てある。

第二節　波斯敎の經典

波斯敎の經典はゼンド、アヴェスタてある。アヴェスタとは或は智識の意味てあるといひ、或は法の意てあると稱して一定してをらぬ。而してゼンドは注釋の義てある。即ちアヴェスタは古ゼンド語にて書かれたる經典て、ゼンドは波斯語て書いた注釋てある。

アヴェスタは何時頃編成されたかといふに、是れ亦明かてない。併し一時に出來たのてはなくして、數代の間に出來たのてある。西紀前一千餘年頃に出來たといふ說もあれば、紀元頃といふ說もある。本來二十一卷（ニスク）あつたのてある。而して、ゼンド即ち注釋は中世紀に書かれたといふ。

然るにアレキサンダー大王の侵入の時に、大王はペルセポリスの王室圖書

館を焼いたが、其の時此の經典も共に灰燼に歸したが、後ち波斯王朝の時代となりて、ゾロアスター教復興し、次いでサッサン王朝の時アクタクセルクセス王の命に依つて、散佚せる餘燼を蒐集したが、集まつたものは原本の三分の一に過ぎなかつたと傳へられてをる。

アヴエスタは勿論ゾロアスターの宗教思想を傳へてをるが、其の後の思想をも傳へてをる。今其の內容の區分を擧ぐれば次の如くてある。

(一) ヤスナ　犧牲の事を記す。
(二) ヴィスペラド　小さき祈禱文の集錄。
(三) ヤシュツ　稍長き讃頌。
(四) 短篇の讃頌。
(五) ウエンデダード　僧侶に對する敎戒命令等。
(六) アヴエスタ　アヴエスタの名ある諸の斷篇

第三節　波斯敎の敎義

波斯敎の敎義は、前に述べたゾロアスターの敎說を完成したものてあるから、根本はゾロアスターの敎說にあること疑を容れぬ。而もゾロアスターの死後、其の敎は天啓に出づとの信仰盛んになり、形式は次第に善美の位置に到達した。

初めゾロアスターに依つて、アフラと呼ばれた善神はアフラマズダと呼ばれ、全智の神格となつた。彼れは幸福の源泉にして、現世にても未來にても人間に幸福を惠み、豐饒を賜ふ神てある。而して幾多の小善神之れに伴ひ、其の主なる從神六柱ありと考へられ、アフラマズダは火と同一體と考へられ、星辰と同一體と考へらるゝに至つた。

惡神デヴも亦アーリマンの名を以つて呼ばるゝに至り、亦六柱の從神を有し、常に善神と戰ふ。

世界は戰場なり、善神は光明なり、惡神は暗黑なり、善神は眞なり、惡神は僞なり、光明は暗黑と爭ひ、眞は僞と戰ひ、天象萬事、皆悉く神の戰ならざるはない。人は幸福慈惠の爲に、善神に與して、惡神を討たねばならぬ。

惡神の觸るゝ者は一として穢れざるものはない。故に吾れ等は祓ひを行はねばならぬ。惡神に關する汚濁の說は、地、水、火の三素の神聖を說き、之れを瀆すは非常なる罪業と考へらるゝ樣になり、死屍は穢れたるもの故神聖なる地に葬るを得ず、高塔に曝して、鷲鳥の啄み去るに委するに至つた。謂はゆる氣葬なるもの是れてある。

善神アフラマズダは星と同體なり、火と同體なりとの考より、山上常に火を焚き、司祭は之れを護りて、消えざらしめ、以つて惡神を斥け、善神に近づき、其の戰捷を希求する風習を生じ、拜火の風を馴致した。此に於いてか、拜火敎の名稱が出來た。故に波斯敎は其の開祖に因みて一にゾロアスター敎といひ又拜火敎とも稱せらるゝのてある。

第八章　猶太敎

第一節　建國、エホバ、及び預言者

パレスチナは猶太人の國土て、地中海の東隅に位して居る。南北凡そ百四十五哩、東西平均四十五哩程の一小地方て、東にはヨルダン河流れて、一帶の低地をなし、西は地中海の波をうけ、北には喬木鬱蒼たるレバノン山脈連亙し、南はシナイ半島の沙漠と接してをる。猶太人は一にヘブライ人と稱せらるゝが、此の擧大の土壤から、後來猶太基督の二大宗敎が興つて、歐西文明の源泉となり、シナイの山、ヨルダンの水、長へに預言者の古へを偲ばしむるのてある。

猶太敎は猶太人と不二の關係がある。猶太敎は實に猶太人に限つた國家的宗敎てあつて、イスラエルの歷史を知らずしては、此の宗敎を解することは不可能てある。而して猶太の歷史は之れを二大期に分つ事が出來る。即ちバビロン幽囚前と幽囚後の兩期てある。前者は遊牧時代から、國家思想の發展、唯一神の觀念の醇熟時代て、後者は國家確立、神政行はれて、宗敎の完成を見

た時代である。故に本節に於いては、前期に於ける同種族の歴史並に其の宗教思想變遷の一班を紹介し、第三節に至つて、後期確立の宗教即ち猶太教教義の綱領を叙述しようと思ふ。

猶太古代の歴史を知る最も重要な參考書は舊約書である。然るに舊約は固と猶太人の口傳神話を書いたものであるから、直に之れを事實として認むる事は出來ぬが、今は唯傳說に依つて猶太の上古史を述ぶるのである。

傳に據れば、猶太人の祖先はアブラハムといふ人で、唯一神を信じてゐた。其の子イサクから孫ヤコブに至り、ヤコブに十二人の子があつて、後世猶太十二族の先祖となつた。

ヤコブは十二子の中で末子のヨセフを殊に愛したので、ヨセフは其の兄達に惡まれて、野で種々に苦められ、棄てられたが、終に賣られて埃及の奴隷になつた。然るにヨセフは利巧な性質の若者であつたので、段々出世して埃及王の宰相になつた。其の中にカナアンの地に大飢饉があつたので、十一人の兄弟は埃及に穀物を買ひに行つた。カナアンとは低地の義で、猶太又はイスラ

エルの一名である。かくて自分達の追放した弟が宰相になつて居ることが分り、ヨセフは一族を招いたので、アブラハムの子孫は總て埃及に移住する事になつた。かくて猶太人は一神を信じ、十二支族共に繁盛に向つて來たので、埃及王は之れを惡み、種々の壓制を加へた。此に於いてか、ヘブライ人は首長モーゼに引率せられて、埃及を脫し、シナイ半島に向ひ、曠野に彷徨ふこと四十年、神勅に依つて、神がヘブライ人に約束したカナアンの地に入つた。此の間非常な困難に遭遇したが、モーゼは獨一眞神エホバの指導と冥助の廣大なる事を告げて同族を勵まし、神は必ず約束の地に導くべき事を諭した。此の漂浪時代に於ける宗教道德の一切はモーゼの說いた十誡の中にある。是れ實に猶太教の根本思想であつて、猶太國家の憲法とも稱すべきものである。

十誡とは舊約に記すところ、實に左に掲ぐる通りである。

汝ぢ我が面の前に我の外何物をも神とすべからず。汝ぢ己の爲に何の偶像をも彫むべからず。又上は天にあるもの下は地にあるもの並に、地の下の水の中にあるものに何の形狀をも作るべからず。之を拜

むべからず。之に事ふべからず。我れエホバ爾の神は嫉む神なれば
我を惡む者に向ひては父の罪を子に報いて三四代に及ぼし、我を愛し
我が誡命を守る者には恩惠を施して千代に至るなり。汝の神エホバ
の名を妄に口にあぐべからず。エホバは己の名を妄に口にあぐる者
を罰せてはおかざるべし。安息日を守りて之を聖くすること汝の神
エホバの汝に命ぜし如くすべし。六日の間働きて汝の一切の業をな
すべし。七日は汝の神エホバの安息なれば何の業務をもなすべからず。汝も汝の男子女子も汝の僕婢も汝の牛驢馬も汝の諸の家畜も汝
の門の中に居る他國の人も然り。斯く汝ぢ僕婢も汝と同じく休
すましむべし。汝かつてエヂプトの地に奴隷たりしに、汝の神エホバ強き手と伸べたる腕とを以て、其處より爾を導き出し
給へり。是を以て爾の神エホバ汝に安息日を守れと命じ給ふなり。
汝の神エホバの汝に命じ給ふ如く汝の父母を敬へ、是れ汝の神エホバ
の汝に給ふ地に於て汝の日の長からん爲汝に祥のあらん爲なり。汝

ぢ殺す勿れ。汝ぢ姦淫する勿れ。汝ぢ盜む勿れ。汝ぢ其の隣に對し
て虛妄の證據を立る勿れ。汝ぢその隣人の妻を貪る勿れ。又隣人の
家田野僕婢牛驢馬並に凡て爾の隣人の所有を貪る勿れ。

（申命記第五章出埃及記第二十章）

斯くて一部はヨルダン河東に止まり、一部は河を越えてカナアンに入つ
た。是れ西紀前二千年頃から一千三百年頃迄の出來事である。
此に於いて、十二支族は一定の國土を有する農民となり、共同の保護神エホ
バをシナイ山に祀り、此處に種族會議を開き、神意に依つて政事を行うた。然
るに當時イスラエル人の移住以前、カナアンの地に棲んでゐた種族は特別の
宗敎を有し、豐饒の神バアルを拜し、殿堂は國內到る處に建てられ、偶像を飾り
禮儀甚だ盛んであつたので、イスラエル人もいつしか之れに化せられて、エホ
バを信ずると共にバアルをも信じ、遂にはエホバの偶像を作つて禮拜するに
至つた。然るに國運は未だ微々として振はず、南に埃及の强あり、北にアッシ
リアの雄ありといふ有樣で、彼れ等は共に君主國で、イスラエルの基礎は安固

といふ事は出來ぬ。此に於いて十二族は相會して體幹長大美にして勇ある
サウルを選んで王とした。サウル戰死の後、ダビデ王位に昇り、エブスの土地
を定めてエルサレムと名づけ、首府を此に定め、國運隆盛を來し、文學興り、黄金
世界を現出した。次いでソロモン王が位に即いたが、王は有名な智者で、商業、
學藝を奬勵し、レバノン山の良材を以つてエルサレムに殿堂を築き、莊嚴華麗
エルサレムは花の匂ふが如く、地中海の畔に榮えた。然るに王は晩年酒色に
耽り、偶像の崇拜を許し、重稅を課したので、遂に民心を失ひ、歿後イスラエルは
南北兩朝に分裂の不幸を見るに至つた。即ちユダ、ベニヤミンの二族を除く
餘他の十族は北方サマリアに都を定め、イスラエル王國と稱した。而してソ
ロモンの故國は上記の二族之れを支持し、都をエルサレムに置き、ユダ王國と
號した。前者は北朝で後者は南朝である。(紀前九五三)

是れより先き、宗教に關する思想二派に分れて、互に相爭ふに至つた。一は
國粹派で、イスラエル人は古來の唯一神エホバの外何神をも拜してはならぬ
と論じ、他は調和派で、エホバ、バアル併せ拜しても、或はバアル宗教の儀式を以

つてエホバを拜しても差支ないと論ずる一派である。而して後者は實に當
時の時代思想を代表してをる。かくて、イスラエルが王國となつて以來は、神
は國家の保護神、擁護者、國運の指導者、豐饒の惠與者、善惡の監視者となり、天に
在す物質精神兩界の國王となつた。かくて、イスラエル人は特別の恩寵を蒙
る「神の選民」と考ふるに至つた。

而してレビ族之れが祭司となり、エホバの神龕を守護し、神意を人民に傳ふる
中保者となつた。從つて疑はしき事は神意を伺ひて、之れが裁決を與ふる權
を得て來たので、祭司の言は神聖犯すべからざるものと考へらるゝに至り、人
民は一擧一動之れに聽く底の窮屈な律法の基を開いた。猶祭司の外に、聖靈
に感じ、神の天啓を受けて之れを民衆に傳ふる事が出來る特別の恩寵を蒙つ
た人が現れて來た。是れ即ち預言者である。預言者はイスラエルの宗教意
識を開發し、民衆の木鐸となつたので、其の野に叫ぶ熱烈なる警醒の聲は舊約
書の光炎であり、精華である。

南北兩朝は分立以來互に相爭ひ、或は埃及と結び、アッシリアと同盟し、攻伐

叛服常なく、偶像敬は蔓延して、古來の宗教は潰されたので、多くの預言者が之れを痛撃した。かくて、國難相踵いで至り、人民塗炭の苦に沈んだが、彼れ等は猶神の恩寵に依つて、アブラハムの子孫の繁榮する時が、終には來るに相違ないと信じて居た。然るに、預言者等はいかにエホバ神はイスラエルと特別の關係があつても、神は善に與し惡を斥くる正義の神であるから、イスラエルが神の命に背き、惡を犯す以上は、多くの艱難を下すのである。如何に犧牲を捧げ、祭壇に血を濺いでゝ、何の甲斐があらう。神は慈惠の神である。誠心誠意に奉仕せねばならぬ。汝等四十年間曠野に彷徨うた時には犧牲を捧ぐる事もなかつたが、神は恩寵を垂れて、約束の地(カナアン)に導き給うたではないか。犧牲何するものぞと叱斥した。神は猶太に限つた神ではない。萬國の神である。正義の神である。世界唯一の神である。正善の神であると絶叫した。ホセア、アモス、イザヤ、エレミヤ等は鐵中の鏘々たる者である。

而も攻伐は絶えなかつた。アブラハムの子孫は戮を執つて互に相殺した。異邦人の蹄に同胞の血汐を蹂躙せしむる事を悔いなかつた。偶像は刻まれ、

犧牲を焚く煙はシナイの山に靉靆き、肥えたる犢は祭壇に屠られた。かくて國歩艱難の中に民衆は天の一方を望んで、イスラエルに榮光ある「主の日」の來らんことを翹望した。而も神の光はレバノンの香柏の蔭にも、アシヤンの橿の葉にも臨まなかつたのである。

北朝は十九王二百九十年にして、紀元前七百二十二年アッシリア王の滅すところとなつた。之れに後るゝこと一百三十六年、南朝は二十王凡そ四百年にして、バビロン王ネブカドネザルの爲に攻められ、エルサレムの圍み解けざること二年、紀元前五百八十六年、城遂に陷り、ソロモン王の所建の神殿は破壞され、全族バビロンに移住するの悲運に會した。之れを「バビロン幽囚」と稱するのである。かくて、後世の人をして、「ソロモンの榮華も此の花(百合花)に如かざりき」と歎ぜしむるに至つた。

然るに紀元前五百三十八年波斯王サイラスがバビロンを滅したので、此にイスラエル人は故郷に歸る事が出來た。併し猶波斯王の配下に屬し、ユダ族の長ゼルバベルが之れを治めて居た。此に於いて、彼れ等はエルサレムの神

殿を回復して、唯一神エホバを拜し、エッラなるものが、從來の口傳傳說に據つて、宗教の儀式制度を一定した。律法此に大成して、謂はゆる「モーゼの五書」が出來たのである。時に紀元前四百四十四年、猶太教は此に成形を得、全く他律的な律法教となり、祭司教と固結したのである。

第二節　猶太教の經典

猶太教の經典は舊約全書である。猶太人は之れを左の三部に分類した。

第一　律法

第二　預言者の書

第三　記錄

即ちモーゼに神の諭げた天啓を記した律法と、其の後の預言者の書と、祝祭の時に讀む讚美歌類、格言の類、夫れから日誌記錄の類を含んでをる。今內容の詳細を示さう。

五書

創世紀　出埃及記
利未記　民數記略
申命記

歷史類

約書亞記　士師記
列王記略(上、下)

預言書類

以塞亞書　耶利米亞記
但以理書
何西亞書　約耳書
阿巴底亞書　約拿書
拿翁書　哈巴谷書
哈基書　撒加利亞書

詩歌類

撒母耳書(前、後)

亞麼士書
米迦書
西番雅書
馬拉基書

以西結書

詩篇　箴言　約百記　雅歌
路得記　耶利米亞哀歌　傳道之書
以士帖記
歷史日誌類(後集)
歷代史畧(上、下)　以士喇書
尼希米亞記

右の中、預言書の中には、熱烈なる信仰、清新の氣の溢れたものが澤山あり、詩歌類の中には希伯來の文學として趣味津々たるものがある。殊に詩篇の如きは、今日なほ猶太基督兩教徒の等しく愛誦するところてある。

要するに舊約は次章に說く新約と共に古代希伯來人の產出した文學の全書ともいふべきもので、固より其の中には、荒唐怪誕なものも多いが、又優婉莊嚴なものも少くはない。是れをレバノン山とヨルダン河の間に棲んて居た古代民族の思想の描寫と見る時に於いては、其の趣味は又甚だ饒かなるものがあるのてある。

第三節　猶太教の教義

エホバは唯一の神てある。神は世界を創造し、人間を作つた。神は天啓に依つて、モーゼに其の法を示した。十誡以下の律法即ち是れてある。イスラエルの民は神に從ひ、神の惠みに賴つて益繁榮する樣に、特に恩寵を賜はる「選民」てある。エホバはイスラエルの主、君、首長てある。故にイスラエルの民は專心にエホバを拜し、餘他の諸神偶像に跪いてはならぬ。猶太教の根本思想は要するに此の外に出てぬ。「汝我が面の前に我の外何物をも神とすべからず」とは十誡中の第一誡てある。太古蒙昧の世、多くの蠻族が多神や禽獸を拜して居た間に、獨り唯一神の信仰を絕叫したのはイスラエル人の誇りてある。然るに後代猶太教が成形を得てからは全く律法教となつた事は、波羅門教と同一てある。今其の教義の一斑を紹介しよう。

(1)　世界創造　世界創造の事は舊約書の創世紀に猶太人の傳說が描かれてをる。

元始に神天地を創造たまへり。地は定形なく曠空しくして黒暗淵の面にあり神の靈水の面を覆ひたりき。神光あれと言たまひければ光ありき。神光を善と觀たまへり。神光と暗を分ちたまへり。神光を晝と名け暗を夜と名けたまへり。夕あり朝ありき是首の日なり。神言たまひけるは水の中に穹蒼ありて水と水とを分つべし。神穹蒼を作りて穹蒼の下の水と穹蒼の上の水とを判ちたまへり即斯なりぬ。神穹蒼を天と名けたまへり。夕あり朝ありき是二日なり。神言ひたまひけるは天の下の水は一處に集りて乾ける土顯べしと即ち斯なりぬ。神乾ける土を地と名け水の集合るを海と名けたまへり。神之を善と見たまへり。神言たまひけるは地は青草と實蔵を生ずる草蔬と其類に從ひ果を結ぶ樹を地に發生すべしと則ち斯なりぬ。地青草と其類に從ひ實蔵を生ずる草蔬と其類に從ひ果を結てみづから核をもつ所の樹を發生せり。神これを善と觀たまへり。夕あり朝ありき是三日なり。……神言給ひけるは我儕に象て我儕の像の如くに我儕人を造り之に海の魚と天空の

鳥と家畜と全地と地に匍ふところの諸の昆蟲を治めんと、神其像の如くに人を創造たまへり。即ち神の像の如くに之を創造之を男と女に創造たまへり。……

斯天地および其衆群悉く成ぬ。第七日に神其造りたる工を竣たまへり。即ち其造りたる工を竣て七日に安息たまへり……神土の塵を以て人を造り生氣を其鼻に噓入たまへり。人即ち生靈となりぬ。エホバ神エデンの東の方に園を設て其造りし人を其處に置たまへり。生命の樹及び善惡を知の樹を生ぜしめ給へり。……是に於てエホバ神アダムを熟く睡らしめ、睡りし時其肋骨の一を取り肉を以て其處を塡塞たまへり。エホバ神アダムより取りたる肋骨を以て女を成り之をアダムの所に携きたりたまへり。アダム言けるは此それわが骨わが肉の肉なれ。此は男より取たる者なれば、之を女と名くべしと。……(創世記第一章第二章)

斯樣にして、天地成り、萬物生じ、男女も生じ、アダムとエバとは樂しくエデンの園に遊んで居たが、さかしい蛇に欺かれて、エバが神の禁じて居つた智慧の果

を食べ、アダムにも食べさせたので、此に人は是非善悪の分別を生じ、二人は永へにエデンの園を逐はるゝ事になつた。而して神の誡を破つた罰として、人間は永久に働かねばならぬ様になつた。労働は神罰てある。此の二人が人間の先祖てあつて、数代の後にアブラハムが生まれ、又数代の後にモーゼが出たのてある。

(2) 罪悪　斯くの如く、人間の先祖は罪を犯して、エデンの花園を放逐されたのてある。故に其の子孫は皆罪悪を有してをる。即ち神意に違うてをるのてある。故にイスラエルの民は實は神の愛兒てはなくて、神の罪人てあつた。従つて深く神の心に服従して、十分達はぬ様に勉めねばならぬ。斯く考へて彼れ等は神を懼るゝの餘り、戰々競々として神意に異はぬ様に心を用ひた。此に於いてエホバは秋霜烈日の嚴格なる神となつた。然らば、神の心に従ふには如何にすべきてあるか。

(3) 律法　神に従ふのは、神の教め教に従ふ意てある。神は天啓に依つて其の心をモーゼに告げた。モーゼは神の天啓を律法として遺した。而して律法

はエッラに大成された。故にイスラエルの民は此の律法の一點一畫も曲げずに服従し、遵奉せねばならぬ。而も律法は大體は規定してをるが、實際實行上に起るあらゆる疑問には答へぬ。左様な時には何處に其の疑問を質すべきてあらうか。律法に通じた者は祭司てある。故に斯る疑問に答ふるものは當然祭司てなければならぬ。祭司は律法の解釋者てあり、神意の取次人てある。此に於いてか、祭司の權力は印度の波羅門の如く強大になり、供犧儀禮は益詳細に規定され、人々は一言一行律法に據らなければならぬ有様になり、律法は精神上は勿論、社會制度上の權威を有することゝなり、法律政治宗教の全體となつた。

神は嚴肅なもの、神聖なものといふ考へから、神殿、神器は近づく事の出來ぬ聖物と變じ、非常に潰穢を忌む思想が生じた。動物等の穢れた物は食はぬ。異教徒や異人種とは食卓を共にせぬといふ様な習慣が出來、猶太人は淨い種族てあるといふ自負心となり、割禮を以つて猶太人特別の徴と考へ、エホバ神を拜するのは猶太人の特權て、異人種の與る能はざるところと思ふ様になり、

偏狭、排他の陋習となつた。是に於いて、猶太教は全く、律法的、種族的の化石教となつてしまつた。

之れを改革して、新生命を吹き込んだのが、後に説くイエス、キリストである。

第九章　基督教

第一節　イエス及び其の時代

南北両朝の城壁空しく蔓草に鎖されて、春は幾度かレバノンの山を飾つたが、憐むべき猶太人は依然として亡國の民たるを免れなかつた。彼れ等は神の約束の地に居りながら、神の榮光に接する事は出來なかつた。屈辱は連りに至り、鎖鑰は愈固くなつた。此の期、此の時、猶太人は神が必ず其の使を遣して、斯る災厄から同胞を救ひ給ふであらうと信じて、救世主の降誕を翹望して居た。斯る時代の渦迴の潮流に呱々の聲を擧げたのが、ヨハネとイエスである。

西暦紀元前第四年十二月二十五日、イエスはエルサレムに程近きベッレヘムに生まれた。時に猶太はローマに屬し、封王ヘロデの世であつた。彼れの生まるゝや、或は新星天に輝いたといひ、或は野の牧人に異象現れたと傳へてをる。父はヨセフといふて大工で、母はマリヤといひ、聖靈に感じて胎んだと

記してある。イエスとは八日目に命けた。彼れはエルサレムの神殿を拜し、一時難を埃及に避けたが、ヘロデ王の歿後ナザレに還つて來た。十二歳の時父母と共にエルサレム禮拜を行ひ、神學に心を傾けた。其の消息は明かでないが、恐らくは群童と共に、羊を追うて、牧草の中に戲れて居たのであらう。

吾人は此に於いて、當時猶太の社會を一瞥する必要がある。前章既に述べた通り、猶太敎は全く律法的化石敎となつてしまつて、供犧、拂穢等の外的儀禮の外何もなかつた。而して此の頃は宗敎上社會上にも分派が興つて、各意見を固執して居た。就中勢力のあつたのが、パリサイ派とサドカイ派である。前者は猶太敎の正統派て保守的傾向を有ち、夥多の律法を制定し、煩瑣な注釋を續撰して、一擧一動皆律法に依り、殊に祈禱、供犧、洗手等を重んじ、國家の危難を憂ふる愛國の徒て、メシヤ降りて必ず國難を拯ふべしと信じて居た。之れに反してサドカイ派は注釋を斥け、煩瑣な律法を好まなかつた。さればとて、高尙な宗敎意識があるでもなく、つまり、パリサイ派に比べて、世俗的進歩的といふまて、ゞ懷疑派てあつた。而も愛國の情の烈しい事は前者に讓らない熱

情の徒てある。其の他に人々に指彈される稅吏の一團があるが、上記の兩派が當時社會の中核を作つてゐて、パリサイ派には學者祭司等から中等社會の人々が多かつた。

人々生命なき律法に救濟を尋ぬる此の時代に當り、新しき聲はヨルダン河の畔から起つた。「身に駱駝の毛衣を着、腰に皮の帶を束ね、蝗蟲と野蜜を食物とせる」一異人は「天國は近けり、悔改めよ」と絕叫した。人々は耳を傾けた。かくて四方からヨルダン河に馳せ集つた。彼れは此れ等の人々に浸禮を施し、新福音を宣傳した。嗚呼彼れは何人であらうか。猶太人が翹望してゐたメシアであらうか。彼れは實にバプテズマのヨハネ其の人である。ヨハネはイエスに先つ事六箇月、サガリアの子と產まれたのである。彼れは更に叫んだ。

蝮の裔よ、誰が汝等に來んとする怒を避くべき事を告げしや。然ば悔改に符ふ果を結べよ。爾曹われらが先祖にアブラハム有と云ふことを意ふ勿れ。我爾曹に告ん。神は能この石をもアブラハムの子と爲しめ給ふなり。今や斧は樹の根に置る。故に凡て善果を結ざる樹は斫れて火に投入らる

べし。我は爾曹を悔改させんとて水を以て爾曹にバプテスマを授く。我より後に來者は我に勝る能力あり。我は其履を提にも足ず。彼は聖靈と火をもて爾曹にバプテスマを授ん。手には箕を持て其禾場を淨め、麥は斂て其倉に入れ、糠は熄ざる火にて燬くべし。(馬太傳第三章)

イエスも亦ヨハネに就いて、バプテスマ(浸禮)を受けた。バプテスマとは身體を水で洗ふ儀式で、大抵は川に浴した。其の意はヨハネは精神と身體と共に淨からん事を要としたからである。然るにヨハネは婚姻の事に就き、ヘロデ王を諫めたので、其の怒に觸れて、幽囚の身となり、後王城饗宴の際、果なくも、少

女の盤上に頭を置くに至つた。

イエスは斯くて、宗教上の冥想に耽つたが、傳に據れば四十日間惡魔の爲に曠野に試みられたといふ。夫れより、カペナウンに行いて、其の新福音を宣言したのである。「天國は近けり、悔改めよ」とはイスラエルの迷へる羊の上に響き渡つた第一の叫であつた。彼れは、湖邊て、シモン、アンデレ、ゼベタイの子ヤコブ等の弟子を得た。イエスは湖畔の數多の會堂て福音を說いたが、集まる人が多かつた。彼れは山に登つて、群衆に向つて、下の說敎をした。

心の貧き者は福なり、天國は即ち其人の物なれば也。哀む者は福なり、其人は安慰を得べければ也。餓渴ごとく義を慕者は福なり、其人は飽ことを得べければ也。矜恤ある者は福なり、其人は矜恤を得べければ也。心の淸き者は福なり。其人は神を見ことを得べければ也。和平を求る者は福なり、其人は神の子と稱せらるべければなり。義ことの爲に責らるる者は福なり、天國は其人の者なれば也。云々(馬太傳第五章)

是れ即ち有名な「山上の說法」て、基督敎の神髓は此の數言にあるのてある。是れより先き、彼れはナザレ邑に說法を試みたが、鄕人彼れを罵つて、「彼れはマリヤの子にあらずや」と叫び、耳を貸さないのみか、崖の上に連れて行つて、殺さうとした。イエスは難を免れて、諸方に福音を傳へ、我れは「メシア」なり、神の子なりと絕叫した。

彼れは、從來宗敎上の儀禮に與る事の出來なかつた、稅吏と食卓を共にした

のて、猶太人の憤激は甚しかつた。彼れは、律法の破壊者てある。神とモーゼとを瀆す者てあると彈劾されたが、彼れは敢て律法を破るものてはない。否之れを成就せんが爲に世に出てたのてあると辯解した。彼れは稅吏の食卓を終へて、山に入り、沈思之れを久しうして、十二人を選んて使徒とした。謂はゆる十二使徒是れて、ペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネ、ピリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、ヤコブ(アルパイの子)ゼロデ、ユダ(ヤコブの兄弟)とイスカリオテのユダの人々てある。

イエスは使徒と共に、ガリラヤ湖上に暴風に襲はれたが、幸に對岸に渡る事が出來た。かくて、彼れは、十二の使徒を宣敎の爲に四方に派遣した。

其の後イエスはペテロ、ヨハネ、ヤコブの三敎徒と共に祈禱の爲に山に入つたが、祈つて居る中に、顏容皓潔、衣色皎然と輝いて、モーゼ、エリヤと遇うたと傳へられてをる。彼れの弟子等はイエスが必ずメシアとなつて、故國の危難を救ふに相違ないと考へて居たので、愈王國が出來た曉には、我れ等の中誰が最も高い位につくてあらうかと談じ合つて居た。

使徒の母達も亦左樣に考へて、イエスに我が子をこそ爾の左右に坐らせ給へと請ふものがあつた。加之當時「我れはメシアなり」とのイエスの宣言を聞いた猶太幾萬の民衆はイエスが實際國難を救濟する神の使者てあらうと考へて、一時凄じき勢て馳せ集まつたが、イエスの福音は悔い改めて、神の旨に從へといふ精神的王國の建設にあるを覺つたので、失望の色は嘲笑の聲となり、信賴の熱望は今や迫害の火難と變つた。危難は刻々迫つて來たのてある。

加之、イエスは學者祭司を極力排擊した。彼れ等の虛禮虛式を罵り、誓言祈禱を斥け、審判の日必ず來るべしと叫んて、一步も假借しなかつたので、益パリサイ、サドカイの徒の嫌惡するところとなり、彼等は如何にもしてイエスに失言の責を負はせて、罪に陷れんと企てた。彼等は一日卒然として、貢をカイザル(羅馬王をさす)に納むべきや、否やを問うた。イエス彼れ等に命じて、貨幣を取り來らせ、其の表面にある肖像を指して問うて曰ふやう、これは誰ぞ。彼れ等そはカイザルなりと應へたので、イエスは嚴然として、「神の物は神に返し、カイザルの物はカイザルに返せ」と叫んだ。

彼れは、最後にエルサレムに行かうと思うて、サマリヤの方に向つたが、路塞がつたので、路を轉じて、橄欖山に登り、エルサレムに入つた。斯くて翌は城下に福音を說き、夜は橄欖山に宿つた。彼れはエルサレムに於いて最後の逾越(スギコシ)節を迎へ、十二の使徒と共に晩餐につき、自らパンを割いて之れを與へ、共に葡萄酒の盃を乾した。而して此の中に一人我れを賣る者があることを告げ、暗に永訣を敘した。後に之れを「最後の晩餐」と名づくるのである。

さて一方には使徒中の一人ユダは銀三十枚を受けて、學者祭司の徒に師イエスを賣る事にした。イエスは晩餐を終へて、使徒等と橄欖山に登つた。使徒等は打連れて歌ひながらゲッセアネといふ處に行つた時、ユダ多くの祭司等と之れを圍んで、彼れ等に知らせる爲にイエスに接吻した。此に於いてか、イエスは劍と棒とを持つて押寄せて來た祭司の徒に囚にされた。

イエスは彼れ等に引かれて、翌曉方伯の前に据ゑられた。彼れ等はイエスが律法を瀆し、猶太の王と稱したからと、宜しく十字架に上すべきであると主張した。イエスは荊の冠を戴かせられ、絳衣を着せられ、唾され、罵られ、あらゆる

侮蔑を受けた。斯くて、他の盜賊二人と共にクラニオンに於いて十字架上に磔殺された。群衆喧擾して、わめき罵る中に、彼れは天を仰いで、「エリ、ラマサバクタニ」と叫んで、瞑目した。「エリ、ラマサバクタニ」を遺(サ)たまふやといふ意味である。

彼れの死後、三日、彼れは墓を脫して、復活昇天したと記されてをる。後にパウロに至つて、彼れは人間の罪を贖はんが爲に、十字架上に犧牲になつたのであるといふ考へが起つて來て、彼れは萬人の救主キリストとなつた。キリストとはメシアの希臘音である。

彼れは三十にして、福音を宣傳し、三年にして、世を捐てた。イエスは父母の命じた名である。キリストは救世主の義である。彼れの說法に基いて、出來た宗教は、之れを耶蘇教又は基督教と呼ぶのである。

彼れの傳記も亦神怪奇蹟に滿ちてをる。併し吾人は深く之れを究むる必要を認めぬのである。

第二節　基督教の經典

基督教の經典は新約全書である。新約全書は四種の福音書、使徒の傳道史同書簡等を集錄したもので、固より一時に出來たものではない。而して此れ等の物が書かれたのは何時頃かといふに、馬太（マタイ）、馬可（マルコ）、路加（ルカ）の三福音書は紀元八十年頃迄に出版され、其の他のものは之れに次いだ。紀元第二世紀頃には、使徒等の說敎を聽いた人達も段々なくなるし、異說も起つて來たので、聖書を確定して置く必要が出來、其の頃迄に、四福音書、及び使徒の書簡類は正確疑ふべからざるものとして、一般に承認する樣になり、其後第四世紀に至つて、今日の形の新約書が出來上つたのである。今其の內容を少しく說明しよう。

(一)　四福音書

福音とは、喜ばしき音づれの意味で、此の四書は天國に生まるゝ敎訓を錄したのだから斯く名づくるのである。四書とは(一)馬太傳(二)馬可傳(三)路加傳(四)約翰傳の四種で、前三書を共觀福音書とも呼ぶ。

(イ)　共觀福音書

之れに屬する三福音書は使徒等がイエスの說敎を各記載した記錄である。初め馬太はイエスの敎訓を集めて公にし、次に馬可はペテロから聞いたイエスの言行を錄して公にした。是れが馬可傳である。次に前二書の材料に依つて馬太傳が出來たが、編者は誰か分らぬのである。偖又路加も同じ材料を使用して、路加傳を作つた。斯くして、三種の福音書が出來たが、固より初めは口々に傳へたものを三人が別々に集錄したので、大體は似てゐるが、多くの點に至つては互に異つてをる。從つて種々の特色がある。

(ロ)　約翰傳

第四の福音書である。此の書はエペソに於ける使徒約翰の仲間から出來たのであるが、或は約翰の作とし、或は其の徒の作とし、議論紛々たる有樣である。併し內容は前三書と等しくイエスの言行を錄したので、唯聖靈（ロゴス）に關する哲理的の見解が雜つて來て、比較的高尙で、敎會以外の影響が見えて居る。此の書は紀元九十年乃至百年頃に世に出たのである。

(二) 使徒行傳(ギョーデン)

イエスの復活から、パウロがローマに囚はれて居た二年の終りまで、三十年間の傳道の記錄である。筆者はパウロの友ルカであらうと傳へられてをる。此の書の世に出たのは、紀元七十年乃至八十年頃である。

(三) パウロの書簡

パウロが異邦傳道の途次、時々書き送つた書簡で、教理擁護の爲に書いたのもあれば、教會の事件について意見を述べたのもある。其の細目は次の通りである。

羅馬書(ローマ) 哥林多前書(コリント) 同後書
以弗所書(エペソ) 腓立比書(ピリピ) 哥羅西書(コロサイ)
提摩太前書(テモテ) 同後者 提多書(テトス)

(四) 其の他の書簡

其の他の傳道者の書簡で、細目は左の通りである。

希伯來書(ヘブライ)(日本譯にはパウロ作としてあるが實は作者不明)
雅各書(ヤコブ)(イエスの兄弟ヤコブの作)
彼得前書(ペテロ)
同後書(共に作者不明)
約翰の書簡(第一書、第二書、第三書)
猶太書(ユダ)(イエスの兄弟ユダの作と傳へてをる)

(五) 默示錄

作者は約翰と傳へられてをる。羅馬のドミシアン帝頃に出來たもので、多くの譬喩を說いてある。

序に邦語譯聖書の由來を一言しよう。邦語譯は新約が先に出來て、舊約が後から出來たのである。德川時代には基督教は嚴禁されて居たので。マニラ及び琉球で邦語譯を作つて、窃に輸入して居た。就中マニラ譯は同地在留の宣教師が漂着した本邦漁夫の助力を得て作つたのである。而して、明治になつてから、ブラウン、グリーン、ヘボンの三神學博士と邦人奥野正綱、高橋五郎、松山高吉の三氏が、支那譯を參照して、マニラ、琉球二譯を修正し、明治二十一年

に出來たのである。

舊約は邦人の方は高橋、松山の二氏之れに與つたが、松山氏は英語に通ぜず、且つ暫く關係して止めたので、大部分は高橋氏の筆に成つたといふことである。

第三節　基督教の教義

基督教も佛教と同じく、幾千年の間に其の教義は非常に變遷した。或は希臘哲學の感化を受け、或は東洋制度の影響を受けて、種々雜多な發展を觀たのである。基督教に於ける斯る教理の研究を神學（セオロジー）と稱する。基督も釋迦と同じく、理論を說いたのではなく、平易な痛切な福音を宣べたのである。故に今は其の概略を紹介しよう。

(イ)　神は愛なり

基督の說いた神はモーゼの觀た唯一神である。併し基督時代には猶太教の條下に說いた樣に、猶太の國難は、益罪惡の觀念を深くし、人々はひたすら神罰

を恐れ、律法を固守したので、神は嚴肅なるものとなつてしまつた。基督は之れに反して、神と人との關係を父子の間柄と觀た。而して神は愛なりと宣言した。故に人間は神の子である。速に罪を悔い改めて神に縋れば、神は愛であるから、救はれるのである。神には愛、人には信、是れが基督の新福音である。

人は凡て神の子で、神の前には平等である。從つて、人々は互に同胞である。神が人々を愛する樣に、人々は互に相愛し、相助けねばならぬ。神は憎るべきものではない。神は親むべく、頼るべきものである。

(ロ)　博愛

同胞の觀念から自然に湧いて來るものは博愛の觀念である。「目にて目を償ひ、齒にて齒を償ふのは何人もするところである。兄弟にのみ安否を問ふは惡人もする事である。人々は宜しく博愛でなくてはならぬ。自れを惡む者の爲に祈り、自れを呪ふ者の爲に祝福してやらなければならぬ。人若し自れの上衣を奪ふならば、宜しく下衣をも與ふべきである。右の頰を打つならば

左の頬をも向くべきである。他人の罪や過を笑うてはならぬ。他人の眼に塵が入つたのは分るが、我が眼に梁が横つてをるのは見えぬ。汝等どうして、自れが眼の梁を知らないで、他人の眼の梁を笑ふ事が出來よう。

人に物を施し、人に救を與ふるのは、なるべく内密にするが宜しい。右の手のなした事は左に知らせぬ位に陰徳を施せ。假令人は知らんても、神は明に報いを授けらるゝのである。

基督は此の考で、當時の人の指彈して居た稅吏と食卓を圍んで、頑固派の攻撃を顧みなかつた。彼れは心無くして行ふ僞善を極力排斥した。彼れは其の信者に凡ての物を與つて、貧しき者に施せと叫んだ。小善も神の前には大きく報いらるべしと敎へた。惡に敵せず、博く愛せよといふのは彼れの趣意である。

(八) 天國

猶太人の天國は猶太王國の黄金時代を意味して居つた。詳しくいへば、エホバ神は將來必ずメシアを送つて、猶太人を國歩艱難の中から救うて、光榮ある

平和安樂の國となし給ふと考へて居た。此の光榮勝利の國が彼れ等の謂はゆる天國である。故に天國はメシアが天から齎すもので、飽迄現實的の王國であつた。

基督の考へた天國は之れと異つて居るのである。彼れは「天國は汝の衷にあり」と敎へ、芥子種は小さいが、後に成長すれば、空の鳥も來つて休む樣になる。天國も亦斯の通りであると言ひ、斯く天國は精神的である。從つて、心の清きもの、心の貧しく單純なものは天國に入る事が出來る。人々は嬰兒の樣にならねば、天國に入る事は難かしい。富者は心が穢れてをるから、天國に入る事の難い事は、駱駝の針の穴を通るよりも、一層困難であると說いた。天國は勵んで取らねばならぬ。人々はいかに罪に穢れて居ても、悔い改めて、神に信順すれば救はれて、天國に入る事が出來る。彼れは猶太敎の律法的虛禮を修めて天國を翹望する形式主義を否認して、天國を全く倫理的に解した。

我を召て主よ主よと曰もの盡く天國に入に非ず。唯これに入者は我天に在す父の旨に遵ふ者のみなり。

天國は海に投て各樣の魚を取る網の如し。既に盈れば岸に曳あげ坐りて、其の嘉きものを器にいれ、惡しきものを棄るなり。（同　第十三章）

誠に實に爾に告ん。人もし新に生れずば神の國を見る事能はじ。（約翰傳第三章）

「新に生まるゝ」とは罪を悔い改めて、神に歸するの意てある。要するに心を清くせねば、天國に入る事は出來ぬのてある。

（二）罪惡

基督は非常に罪惡を疾んだ。若し爾の手爾を罪に陷らするならば、斬つて之れを棄てよ。全身地獄の火に燒かるゝよりは優つてをると說いた。人は何人も罪惡を犯してをらぬものはないから、決して他人の罪惡のみを嘲つて、自れの罪を忽にしてはならぬ。併し罪惡は決して動かす事の出來ぬものてはない。如何なる罪惡も衷心から悔い改むる時は、神に救はるゝ事が出來るのてある。

以上說教の要領てあるが、要するに、基督は從來の律法に於いて、神の律法と人の自由に作つた立法とを峻別して、眞正の律法を完成しようと試み、今迄律法的形式的に化石して居た猶太教を革新して、精神的倫理的の生命ある宗教となした。注釋神學の中に死んて居た神を與して、之れを人の心に基づけたのてある。基督は十字架の上に死んだが、神は基督に依つて復活したといふべきてある。

基督歿後、彼れは神の獨子て、人間の身代りとして磔殺され、あらゆる罪を贖うたのてあるといふ信仰が起り、彼れは神と人との媒介者と考へられ、紀元三百二十五年ニケーヤ會議に於いて、神と子（キリスト）と聖靈とは本質に於いて同一てある事を議決した。三位一體說即ち是れてある。

第四節　ニケーア會議信條決議

基督歿後、パウロの傳道に依つて、基督教は段々ローマの方に擴まる樣になり、多くの敎會が出來た。パウロはローマに幽死し、其の後の迫害は激烈てあ

つたが、後コンスタンチン帝が位に即くに及んで、ローマの國教とせらるゝに至り、歐洲布教の基礎愈確立した。

斯く傳道の功が擧つたと共に、敎義に關する異論も多くなつた。コンスタンチン帝は異論を一定しようといふ考で、ニケーアに宗敎會議を開いた。此の會議は三百二十五年六月十四日から七月二十五日迄開會し、三百十八人の列席者があつた。彼れ等はイスバニアの老監督ホシアスを會長として、種々討議の末、二名を除くの外大多數を以つて左の信條を議決調印した。

一　我等は萬物の造主全能の父なる獨一の神を信ず。

一　我等は主キリストを信ず。彼れは本質神と同じく、神より生れし子、神より出でたる神にして、我等を救はんが爲に、世に降り、肉體を取りて人となり、死後第三日に甦生昇天し、萬民を審判んが爲に來らんとする者なり。

一　我等は聖靈を信ず。

此の會議は基督敎史上有名なもので、此に信條は確定し、反對の二名は皇帝の

命に依つて、放逐され、宗論は止んだのである。而して當時首府コンスタンチノープルが未だ出來て居なかつたので、此の地に開いたのである。

第十章　回回教

第一節　マホメット及び其の時代

アラビアに於けるセム族は久しく遊牧の狀態にありて、沙漠の中に彷徨してゐた。元來アラビアは乾燥なる大沙漠で、遊牧の外には、駱駝に乘つた隊商が往復するのみで、天幕を張りて生活し、都府の如きは僅に二三海濱に近く建てられてゐたのであつた。而して人は慓悍獰惡で、復讐鬪爭日も是れ足らざる有樣である。唯斯る寂寞たる修羅場にも俗信に依つて年に二回一箇月間鬪爭復讐を止めて、相共に其の尊ぶ神の靈場を巡拜する風習があつた。

マホメット以前には部落部落に崇拜する神があつた。而して此の神は其の部落の長であつて、部落の者は之れに犧牲を捧げ、相集まりて、其の肉を食ひ、部落の饗宴を開いてゐた。斯る神の神體は樹木又は石を以つて表はされ、彼れ等は之れを崇拜した。アラビア人が古來崇拜する神の中で、アリラトは女神で、其の最も尊ぶところであつた。其の他天然現象を神化した神が澤山あ

るが、メッカ市に祀られてゐたフバルは雨の神で、沙漠の住民がいかに雨を渇望したかを表してをる。又同じメッカ市にカーバと稱する黑石がある。之れが又非常に尊い神聖なる石で、巡禮者は或は撫で、或は接吻して、隨喜の涙を流すを常とするので、後には殿堂を建つる事になつた。マホメットの時に此の石は非常に尊敬せられ、マホメット家は神聖なる聖地保護の權を有してゐた。曾て、此の黑石安置の件について、數人の首長の間に確執を生ぜんとした時に、若きマホメットは機智を以つて、容易に紛擾を解いた事があつた。

アラビアの俗信は斯る偶像崇拜又は物品崇拜の低度に止つてゐたかといふに、否、決して左樣てない。太古からアラビア人の崇拜してゐた一體の神がある。此の神は部落に關係のない普遍の神てあつた。アラー即ち是れてある。更に詳しくいへば、アラビア人はいかなる神をも之れをアラーと呼んてゐたので、アラーとは特別の神體があるのてはなく、唯神といふ意味の言葉てあつた。然るに此の言葉は前にあげた樣な一部落に限つた神てなく、あらゆる部落の神の通り名てあるので、此の間から普遍神、唯一神の思想が起つて來

た。是れが偶像崇拜物品崇拜のアラビアから熱烈なる唯一神教の興るべき契機であつた。即ちマホメットは此のアラー神の信仰を呼號して預言者となつたのである。而してアラーの崇拜がマホメット教と完成した。

マホメットは西紀五百七十年メッカ市の豪家に生まれた。彼れの一門は當時アラビアの名族て、甚だ榮えて居り、シリヤ地方に隊商を送るコライシュ族に屬してゐた。加之、宗教上重要の地位にあつたので、名望勢威共に市中を壓してゐた。然るにマホメットは幼にして兩親に逝かれ、伯父の家に引き取らるゝ悲運に會したのである。而して彼れは親戚の家に小童として家畜の番をする樣になつた。彼れは商賣に巧みて、利益を得る事も多かつたが、偶メッカ市の富豪寡婦カヂヤなるものが、地方に多くの隊商を出すについて、之れを宰領する人を得るに苦んでゐたが、マホメット適任者として推され、多量の貨物駱駝を率ゐて、シリアの方面からパレスチナ地方に貿易し、諸方の文化宗教に接觸して、少からざる感化を受け、好結果を齎して鄕里に還つた。然るに寡婦のカヂヤは深く之れを德として、其の後種々の事業を委ねてゐたが、終に

結婚を申し出でた。斯くて親族の反對强きにも拘らず、カヂヤはマホメットを迎へて夫とし、孤影寥然たる一個の羊飼ひは直ちに數萬の黃金、數百の駱駝の主となつた。時にカヂヤは四十歲マホメットは二十五歲の靑年であつた。

其の後家產は益增殖し、隊商は度毎に成功し、亦多くの兒女を設けた。カヂヤは歲こそ老けたれ、賢婦て、宗教上に於いてもマホメットを助けた事は少くない。實に同同教に於ける最初の信者はカヂヤであつた。斯くて、マホメットの勞威はメッカ市に漸く高くなり、其の機智は口から口に稱讚せられて、安樂なる生活を送つた。

然るに彼れは其の後數年にして、連りに宗教上の問題に心を傾け、冥想に沈んて居た。彼れは曠野に退いて、深く唯一神アラーを考へたが、或日打倒れ口より泡を吹き、懊惱甚しかつた。是れより彼れは益信仰を强め、ヒラ山に於いて、天使降つてアラーの天啓を告げ、自らアラー神の預言者なりと信ずるに至つた。此に於いてか、彼れは山を降りて、鄕人に告ぐるに、自れの天啓を得たる事を以つてし、人は皆唯一の神アラーに服從すべき事を宣した。然るに鄕人

は誰れとて之れを信ずるものなく、皆マホメット狂せりと冷笑した。彼れは翻つて妻子親族に其の天啓を傳へたが、妻カヂヤ先づ之れを信じ、其の他信ずるものもあつたが、大抵は取合はなかつた。

之れを見たるマホメットの精神は一層の熱烈を加へ、あらゆる偶像を罵り、偶像を拜するメッカ人の地獄に墜つべき事を警告し、速に唯一の神正義の主アラーを拜すべきを以つてしたが、其の結果は愈反抗迫害の火の手を熾んならしむるに過ぎなかつた。而も此の間に正直なる牧夫市民の彼れを信ずる者も出來た。而してマホメット及び彼れ等信者に對する市民の疾惡迫害は愈烈しくなつたので、彼れは一時其の信徒を市外に避難せしめた。然るに、幾もなくして、從來崇拜されてゐた偶像と自己の宣布するアラー神とを接近させて、多少温和な調和説を唱へたので、市民も大に喜んだが、一日彼れは天使降つて非常に之れを詰責したと信ずるに至つて、斷然偶像を排して、唯一神アラーを崇拜すべく宣言した。之れを見たる市民の怒は一層の激甚を加へ、交際を斷ち、嘲笑し、冷罵した。加之不幸にして彼れの最初の信者なる愛妻は彼れ

を棄てゝ黄泉に赴いた。

悲痛憂愁の裡に迫害は益急になつて來る。此の時マホメットはタイフ人に布教を試みたが、失敗に了つた。時に偶メヂナの市民はかねてアラビア人の中から救世主出現すべしといふ信仰を有し、今メヂナにありて新福音を宣してをるマホメットこそ救世主メシアなれと考ふるに至り、遂にマホメットの同市に來りて、教を布かん事を請うたので、マホメットも心動いた。然るに一方にはメッカ市民の迫害嫌惡は極點に達し、彼れを暗殺せんと企つるに至つて、マホメットはメッカ市を脱してメヂナ市に遁逃した。是れ西紀六百二十二年六月十六日の事にして、ヘジラと稱し、此の年を回回教の紀元元年とする。ヘジラとは遁逃の義である。マホメットの新生涯は此の日より始まつたのである。

マホメットのメヂナ市に入るや、市民歡呼して之れを迎へた。彼れはメヂナ市に教會を組織し、禁酒を令し、市の風俗を矯正し、自ら教會に教へを説き、巧妙なる方法を以つて信者の親睦を圖り、勢望隆々として、法皇の觀を呈したが、

彼れは斯く救濟の大義を宣揚すると共に、一方に於いては、多くの妻妾を蓄へ地上の歡樂を恣にしたが、皆之れを天啓に托して恥としなかつた。

彼れがメヂナ市に勢力を得るや、諸方の部落と戰を交へ、殘忍暴逆至らざるなく、アラビア古來の習慣として鬪爭を禁じた平和なる聖月をも顧慮せず、アラーの爲に戰ふは聖月も亦不可なしと敎へ、アラーを信ぜざる者は如何に凌辱し掠奪するも差支なしと敎へたのである。故に血に餓えたるアラビア人は戰未だ終らぬ中に、掠奪を始め、中途にして敗北した事もあつた。而してマホメットは此れ等戰利品の大部分を自己の所有とするを常とした。

メヂナ敎會はエルサレムを宗敎の中心として、禮拜して居たが、マホメットは之れを否認し、更にメッカ市を禮拜する事を定めたので、同市の猶太敎徒と爭鬪を惹起し、猶太敎徒はマホメットの屠る所となつた。

マホメットはメッカ市に復讐せんと欲して、戰ふ事數度に及び、互に勝敗があつたが、六百二十三年ベドルに大勝を獲たる後は、メッカ市民のマホメットと和せんとする心大に動いた。斯くて彼れはメッカ市に巡禮を企て、遂に刃

に斃らずして、メッカ市を回復し、あらゆる偶像を破壞し、アラーの新福音はアラビア半島に愈其の根據を固めた。時に西紀六百三十年であつた。

翌年彼れは最後のメッカ巡拜をなし、敎徒に巡拜儀式の範を垂れた。其の儀式は先づ古來の聖地にあるカーバの黒石に接吻し、殿堂の畔に湧く神泉ゼムゼムの水を掬び、殿堂を廻る事七回、聖地附邊の山溪を巡行し、犧牲を捧ぐるのであつた。巡拜了つて、信徒に告別をなし、翌三十二年六月八日遽焉として天國に上つた。

マホメットは一宗敎の開祖であるが、彼れは佛陀、基督と異つたアラビア的異色を帶びて居る。人生の厭的方面を遠慮なく暴露して顧みないところがある。彼れの信仰は熱烈なるだけ夫れだけ偏狹である。併し曠野、沙漠の地に數多醜陋の偶像崇拜から數萬の民衆を救ひて、唯一神の信仰に導いたのは其の功とせねばならぬ。彼れが掠奪虐殺を恣にし、多妻を娶り、隊商を襲撃して毫も良心に恥ぢる事のなかつたのは、當時アラビアの道德の高からぬ影響て、マホメットがアラビア人たる標徴てある。

第二節　回回教の經典

回回教の經典はコーランと稱する。コーランはマホメットが時々唯一神アラーから受けた天啓を記載した集錄であると信ぜられてをる。故に組織あるものではなく、宗教、政治、軍事に關した斷片的の語錄である。而して、開卷第一章の正義の神アラーの崇拜を說いた回回教の根本教義は、彼れがヒラ山上に於いて天使より受けたる語と傳へられてをる。（マクス、ミュラー博士編東方聖書中に英譯あり）

第三節　回回教の教義

マホメットは偶像を排して、アラーの唯一神に歸依すべきを教へ、アラーは正義の神、最後の審判者にして、アラーの爲に戰死した者は死後天國に至り、清き泉の畔に美酒を酌み、美女を擁して限なき聽樂を得べく、之れに反して、偶像崇拜者は必ず地獄に墜つべしと教へた。彼れは自らを以つて、アラビアの民

にアラーの新福音を宣布すべき神の使、預言者なりと信じた。彼れの信仰は極めて單純である。從つて回回教の根本教義は以上の數項に盡きてをるのである。

彼れが猶太教や基督教に對して、回回教の獨立を事實にした最要の事項は前に述べた如く、宗教の中心點を猶太教、基督教共通の聖地エルサレムからメッカに移した事である。而して、回回教徒たる者の必ず遵奉すべき宗教上の要項は左の五箇條である。

一　アラーの唯一神を信じ、マホメットは其の預言者なりと信ずる事。

一　一日五回聖地メッカに向ひて祈拜を行ひ、毎週金曜日には特別祈拜を執行する事。

一　廣く貧者に施すべき事。

一　マホメットがアラー神の天啓を受けたるラマダンの月に斷食を嚴重に行ふべき事。

一　マホメットの定めたる教則に遵ひて、聖地メッカに巡禮を行ふべき事。

此の教條に依つて、回回教徒は基督教徒、猶太教徒が日曜日を安息日とするに反して、金曜日を安息日とする事は今も昔も變らぬのである。

マホメットの説いた教義はこれ丈である。彼れの死後、其の教徒は、コーランを信ずるか、年貢を納むるか、又は血を捧ぐるか、即ち「コーラン、年貢、血」三者其の「一」を「選べ」と大呼し、半月の大旆を掲げて、歐亞の天地を蹂躙し、サラセン王國を建設するに至つたのは、歴史の語る通りである。故に今は其の原始の狀況を説くに止めて置く。

附錄

附錄の一

日本現在宗教一覽

現在佛教宗派（括弧内は開祖）

(一) 律宗（鑑眞）
(二) 三論宗（慧灌）
(三) 法相宗（道昭）
(四) 華嚴宗（良辨）
(五) 天台宗（最澄）
　(1) 山門派（最澄）
　(2) 寺門派（圓珍）
　(3) 眞盛派（眞盛）
(六) 眞言宗（空海）（新義派覺鑁）

(1)眞言宗
(2)御室派
(3)高野派
(4)大覺寺派
(5)醍醐派
(6)新義眞言宗智山派
(7)同豐山派
(8)眞言律宗
(七)融通念佛宗(良忍)
(八)時宗(一遍)
(九)淨土宗(源空)
(1)鎭西派(聖光)
(2)西山派(證空)
(十)禪宗

(1)臨濟宗
(a)天龍寺派(疎石)
(b)相國寺派(妙茆)
(c)建仁寺派(榮西)
(d)南禪寺派(普門)
(e)妙心寺派(慧玄)
(f)建長寺派(道隆)
(g)東福寺派(辨圓)
(h)大德寺派(妙超)
(i)圓覺寺派(祖元)
(j)永源寺派(元光)
(k)佛通寺派(周及)
(l)方廣寺派(元選)
(m)國泰寺派(運良)

現在基督教宗派

(一)蕃教

(1)天主教

(二)日蓮宗(日蓮)

(1)日蓮宗(日蓮)
(2)顯本法華宗(日什)
(3)本門宗(日興)
(4)本門法華宗(日隆)
(5)法華宗(日印)
(6)不受不施派(日奥)
(7)不受不施講門派(日講)
(8)本妙法華宗(日眞)

總計十二宗　五十三派(臨濟宗除外)

(9)三門徒派(如寂)
(10)一致派(日乾)

(三)日蓮宗(日蓮)

(1)本門宗(日興)
(2)本門法華宗(日隆)
(3)法華宗(日印)
(4)不受不施派(日奥)
(5)不受不施講門派(日講)
(6)本妙法華宗(日眞)
(7)顯本法華宗(日什)
(8)本門宗(日興)
(9)一致派(日乾)
(10)三門徒派(如寂)

(四)淨土宗

(1)淨土宗(法然)
(2)鎮西派(辨長)
(3)西山派(證空)
(4)深草派(善慧)
(5)一條派(忠安)
(6)三鄕派(良忠)
(7)白旗派(然阿良忠)
(8)名越派(尼妙本)
(9)小坂派(尼妙本)
(10)藤田派(尼妙本)
(11)木幡派(尼妙本)
(12)紫雲派(尼妙本)
(13)淨土宗西山派(證空)
(14)淨土宗鎮西派(辨長)
(15)淨土宗深草派(善慧)
(16)淨土宗一條派(忠安)
(17)淨土宗三鄕派(良忠)
(18)淨土宗白旗派(然阿良忠)
(19)淨土宗名越派(尼妙本)
(20)淨土宗小坂派(尼妙本)
(21)淨土宗藤田派(尼妙本)
(22)淨土宗木幡派(尼妙本)
(23)淨土宗紫雲派(尼妙本)

(五)時宗

(1)時宗(一遍)
(2)當麻派(一遍)
(3)奥谷派(一遍)
(4)御靈派(一遍)
(5)四條派(一遍)
(6)市屋派(一遍)
(7)霊山派(一遍)
(8)金光寺派(一遍)
(9)七條派(一遍)
(10)國阿派(一遍)
(11)解意派(一遍)
(12)金台寺派(一遍)
(13)四條金台寺派(一遍)
(14)市屋金台寺派(一遍)
(15)霊山金台寺派(一遍)
(16)七條金台寺派(一遍)
(17)國阿金台寺派(一遍)
(18)解意金台寺派(一遍)

(六)眞言宗

(1)眞言宗(空海)
(2)古義眞言宗(空海)
(3)新義眞言宗(覺鑁)
(4)高野山眞言宗(空海)
(5)東寺眞言宗(空海)
(6)泉涌寺眞言宗(俊芿)
(7)醍醐寺眞言宗(聖寶)
(8)小野眞言宗(寬平法皇)
(9)仁和寺眞言宗(寬平法皇)
(10)大覺寺眞言宗(嵯峨天皇)
(11)三寶院眞言宗(義演)
(12)勸修寺眞言宗(寬朝)
(13)善通寺眞言宗(空海)
(14)智山派眞言宗(智積院)
(15)豊山派眞言宗(長谷寺)
(16)大覺寺派眞言宗(大沢)
(17)醍醐派眞言宗(三寶院)
(18)山階派眞言宗(勸修寺)
(19)中山派眞言宗(善通寺)
(20)御室派眞言宗(仁和寺)
(21)東寺派眞言宗(東寺)
(22)泉涌寺派眞言宗(泉涌寺)
(23)小野派眞言宗(小野)
(24)高野山眞言宗(高野山)
(25)古義眞言宗(古義)
(26)新義眞言宗(新義)

(七)天台宗

(1)天台宗(傳教)
(2)寺門宗(圓珍)
(3)眞盛宗(眞盛)

(4)本願寺派又西本願寺派(1)本願寺派又西本願寺派
(5)興正寺派(蓮教)
(6)佛光寺派(眞佛)
(7)出雲路派(善導)
(8)山元派(善慧)
(9)誠照寺派(道性)
(10)三門徒派(如寂)

(4)本願寺派又東本願寺派(2)大谷派又東本願寺派
(5)興正寺派(蓮教)
(6)佛光寺派(眞佛)
(7)出雲路派(善導)
(8)山元派(善慧)
(9)誠照寺派(道性)
(10)三門徒派(如寂)

(八)眞宗

(1)本願寺派又西本願寺派
(2)大谷派又東本願寺派
(3)專修寺派又高田派(眞佛)
(4)錦織寺派又木邊派(存覺)
(5)興正寺派(蓮教)
(6)佛光寺派(眞佛)
(7)出雲路派(善導)
(8)山元派(善慧)
(9)誠照寺派(道性)
(10)三門徒派(如寂)

(九)天台宗

(1)天台宗(傳教)
(2)寺門宗(圓珍)
(3)眞盛宗(眞盛)